始

神學博士 ケールン著
マスター オブ・アーツ 村田 勤譯

活ける宗教の要素

日本同仁基督教會藏版

大正
5. 12.20
内交

絶えず
忠實にして
成功ある吾が内助たり又
牧會の歡喜と犧牲とを共に
俱にせし獻身的伴侶なる
吾が妻に此書を
捧ぐ

例言

ケールン博士の懇囑辭し難くして予が折々氏の小論文を飜譯したことが緣の端となつて、本年の春頃氏自ら拙宅を訪ふて『君はこの書を譯して呉れまいか』といふ質問を受けた。『夏休でよろしければ』と答へた。これ此の飜譯の任が予の肩に落ちた經過である。この書中には以前予が譯したものも寡くないし、又そを大に增補訂正されたものもあつた。中には予の先輩である故增野悅輿氏を首めとして、久しく東京同仁基督教會の聖壇に立たれた松尾音次郎氏、日本女子大學教授なる松浦政泰氏の筆に成つたものもあつた。この三氏は皆予の同窓にして又予の畏友である。一卷の書として世に公にするには、文體の統一を計る必要があつた爲めに、既に諸氏の健筆に成つた譯文あるに拘はらず、著者の希望を容れて新たに改譯することゝした。予はこの不遜僭越の罪を前譯者と讀

者に謝し、併せて諸氏の寛恕を祈る次第である。

可能と思つた場合には、予は著者の原意をそのまゝあらはすことを旨とした。難解の個處は意譯にし、或は少しく敷衍した點もあらう。著者には親みが深くとも、讀者の或方々にはさうであるまいと思はるゝ歐米の大家に就いては、譯者が說明的の語を添へた。これらはすべて著者の承諾を經たのである。引用された英詩は、甚だ拙劣ではあるが、意味丈を譯して見たが、いかにも珠玉を瓦礫に化するやうな氣がして慚愧に堪へない。十七章の終りには讃美歌が引用してある。原文と和譯とは大分違つてゐるやうであるが、兩方をそのまゝ並べて置いた。

インスピルーションの譯語には最も多く迷惑を感じた。樣々に譯して見た。時には原音をあらはし、終りには靈導とした。讀者これを諒せられよ。

大正五年九月十五日　　村田勤記す

序

本書は十年間日本に滯在して布敎に從事した著者の經驗から發生したものである。書中の諸章は著者が接手した無數の書翰に應じ、且合理的にして同時に精神的なる宗敎を求めて居る人々の質問に應ずる爲めに、書かれたものである。以上の經驗に由つて著者は左の事實を知つた。即ち自由にして進步的なる基督敎の思想が、案外廣く弘まつて居ることゝ、又かくの如く基督敎を解釋せんとする要求の增加しつゝあることを知り得たのである。世人が概ね神學を嫌忌するのではこの種類の神學を嫌忌するのではない。合理的にして容易に生活に移されるやうな神學は、世これを歡迎し、要求して居るのである。予が敎理を辨證しやうとした場合には、そを生活に當て嵌めて、その實際的關係を示すことを主眼とした。不完全ながらも、予が書中に陳述した敎理は、今や日本の社會が日

增に要求し、且必要を感じて居るところの宗教的教訓であらうと、著者は心私かに信ずるのである。若しこれらの教理が、深く人民の心意心情の中に確立されたならば、必ずや最强最善且最も幸福な生活を產出するであらうと、著者は信ずるのである。若しこれらの眞理が、あらゆる個人、あらゆる國民に由つて信ぜられた曉には、然りその時には初めて眞の基督教が充分にその眞相を發揮するであらう。その卓越なる偉大を證明するであらう。この大目的の完成に對して、予が些少たりとも貢獻することを得ば、この書を著はした著者の目的は達せられたと謂ふべきである。

本書中の或章は、曩きに別冊として刊行したものを本書に適するやうに訂正し、又はその一部を新たに起草して、改刪訂補具さに意を用ゐたのである。但し大部分は始めて爰に現はれたものである。前に印刷された或章、例せば十三章十四章の如きは、元來初めて基督教を研究しやうとする者の爲めに、起草さ

れたのである。それだから他の諸章に比して、程度の低いといふ感を免れないであらう。この二章はその配置されてある要素の題目の下に、その占むべき位置に用ゐられてあるのである。

本書の考案と、緒論に述べた活ける宗教の三要素の區別に由つて諸章を分類したことに就いて、一言する必要があるやうに思ふ。各章は、そが分類された編に屬して居る要素の說明、或はその要素の活動の實例として、それ〳〵その地位を占めて居る。或章に就いては、これを三要素の中のいづれに屬せしむべきであるか、疑問の起つた場合もある。かくの如き疑問の起つた時は、その題目の要點やその章の特徵に照らして、これを決定したのである。他の諸章の分類に關しては、毫も疑惑の餘地がなかつた。又或章の如きは、或る要素を說明する爲めに實例を示めしたものであつた。若し予がこの書中に論爭し主張する所にして正當なりとせば、あらゆる重要なる道義的及び宗教的の教訓は、これ

らの三綱目の一に屬すべき筈である。これらの要素の活動とその大切なる理由を示す爲めには、予が本章中に陳述せしところで充分であらうと思ふ。

叮嚀に且原意の徹するやうに、本書を日本語に飜譯された村田勤君に對して、著者は眞摯なる謝意を表したい。

西暦一千九百十六年七月十五日　東京に於て　著者　記す

活ける宗教の要素目次

緒論　本著要旨の概觀

第一編　活ける宗教は眞理に基かねばならぬ

第一章　神は萬人の父なること……頁二二
第二章　神を尋ね索むる道……四六
第三章　神の仁德と惡の存在……七四
　此の兩者はいかにして調和すべき乎
第四章　靈魂不滅の證據……一〇九
第五章　應報と救濟……一三六
第六章　必勝的宗教使命の緊要……一五七

第七章　救主キリスト　……一七八

第二編　活ける宗教は行爲でなければならぬ

第八章　四海同胞……一九五
第九章　理想の指導するまゝに……二二二
第十章　基督教は愛國心を鼓舞す……二四九
第十一章　人生の意義と價値……二七五
第十二章　思想と品性……二九六
第十三章　基督者となるの道……三二〇
第十四章　聖書……三三四

第三編　活ける宗教は生命を與へなければならぬ

第十五章　聖書と精神生活……三六〇
第十六章　不斷の覺醒……三八一
第十七章　信仰の力……四〇〇
第十八章　勝利の生涯……四二七
第十九章　基督者生活上の心得……四四五
第二十章　効果ある普遍的宗教……四七三

活ける宗教の要素目次 終

緒論

神學博士　ジー・アイ・ケールン著

本著要旨の概觀

此書の大體の考案とその內容とを適當に示す爲には、先づ以て吾人が活ける宗教を形造るべき要素を陳述することが大切であると思ふ。夫れ故吾人はこの緒論の一章に讀者諸君が念入りに注意せられんことを願ふのである。

宗教は滅びるものでない。事物の本性に基き人間の必要に應ずるものであるから、宗教はいつまでも滅びない。既成宗教の或ものは亡びるかも知れぬ。それらの宗教の系統は衰へ果てゝしまふかも知れぬ。しかしその歸依者は依然萬を以て數へられて居る。滅びてしまつた宗教の名稱を數へ上げたり、それらの

宗教を說明することは本書の目的でない。本書發刊の趣旨は活きた宗教の要素を示すことである。讀者諸君は各自に此書を讀んで活きた宗教の要素を具備して居ない宗教を奉じて居られはせぬか、自ら省みて吟味していたゞきたい。

一、活きた宗教は眞理に基づかねばならぬ　絕對にして且つ永遠の眞理はとこしへに存在する。眞理はこの物質界が亡びた後までも尙ほ存續すべき活力をそれ自身に具へて居る。眞理は旣に人類を導びきて野蠻より文明に昇進せしむべき力のあることを示した。また人間の有らゆる種族を愈々高く引き擧げて永久に神に接近せしめんとする不斷の力のあることを示めした。この故に眞理と並行一致するものは未來永劫滅ぶる憂ひがない。虛僞は殄滅せられ、幾多の王國は榮枯盛衰の變を免がれない。吾人の棲息する此の物質的宇宙も消え失するかも知れないが、獨り眞理はとこしへに存續するであらう。時としては眞理が敗北して虛僞が時めくやうに思はるゝことがある。その時は我等は左に揭ぐ

る詩人ロウエルの名句を思ひ起して意を强ふすることができる。

眞理はたとひ押潰ぶされ踏つけられても重ぬて起き上らむ
神の永遠無窮なる年は眞理に屬けるものゞかし
しかはあれど虛僞は傷いて苦悶の中に輾轉反側し
遂にその崇拜者のたゞ中に悶死せむ　（意譯）

Truth, crushed to earth, shall rise again,
The eternal years of God are hers:
But error, wounded, writhes in pain,
And dies among his worshippers.

我等は屢々宗教が衰頽しつゝあるやうに思ふことがあるが、それは誤りである。世人が宗教といふ名を附して居る虛僞の或るものを宗教と同一視する爲に生ずるところの誤解である。今や多くの卑怯な人々を驚かすやうな變動が生じ

つゝある。これらの騷動は少しも意に介するに足りないものである。吾人は寧ろこれらの騷動に依て宗教の勃興しつゝあること、その勢力を增加しつゝあること、又永年寄生物のやうに宗教に附着して居つた虛僞から、宗教が分離して自由に獨立しやうとして居ることを期待することが出來る。約言すれば宗教は新しい美に裝はれ、更に豐富な勢力に充ちて再現せんとする用意中なのである。

近頃吾人は合理的宗教といふことを聽くことが多いやうに思ふ。眞理はいつでも合理的のものである。だから眞理の上に立つて居る宗教は固より合理的たらざるを得ない。若しこゝに合理的でないこと、即ち道理に反したことがありとすれば、それは眞理でないから排斥せざるを得ないのである。たとひ有らゆる信條、有らゆる宗教、將たまた世界中の有らゆる經典がそのやうに說き敎ふるにせよ、苟も道理に反した事であるなれば、吾人はこれを信ずるを欲しない。又何人に向つてもこれを信ずることを勸めない。しかし道理に反しないで

も人間の理性で考へ究めることの出來ぬことがある。よく之を充分に知ることが出來ずとも、それを信ずるに足る丈けの證據があれば、吾人は宜しくこれを信ずべきである。わが同胞にこれを信ずるやうに勸めて少しも不都合はないと思ふ。科學者は絕えずその事を實行して居るのである。實例を擧ぐれば科學者は極めて微細な分子の存在を信ぜざるを得ない。證據がある。道理に背反してゐない。しかしその極微分子を明かに考へ究めることは出來ぬ。たゞそれを信ずるまでゝある。合理的宗教に就いてもこれと同樣である。吾人は唯日常の經驗に於て爲すところ、實驗觀察に基く諸科學に於て實行して居ることを、宗教についても爲さうとするまでのことだ。神が無窮の存在者たることを信ぜんとする吾人の信仰は正さにその一例である。そも〳〵無窮といふことを思考するのは人間の能力に及ばない。元來それは、限りある人間の心の狹小な範圍に持ち込まうとするには大き過ぎた思想である。しかしこれは道理に背いたことで

ないのみならず、信じて差支ないといふ證據が澤山ある。だから宇宙の最大眞理の一面として神の無窮的存在者たることを信ずることは道理に適つて居ると思ふ。絶對的に眞實なことは不合理であらう筈がない。また絶對的に不合理な事が眞實であらう筈もない。以上述べたところを綜合して考へて見ると、活きた宗教は是非眞實でありまた同時に合理的のものでなければならぬ。

活きた宗教の基礎となるべき眞理は偉大であらねばならぬし、また根本的でなければならぬ。宗教を說き又はそを敎ふる輩が最も甚しい間違をしたのは即ち此點である。彼等の中には偉大な眞理を說くことを怠つて反て大切でない小いさな問題の研究に一生懸命になつて居るものが往々ある。髮の毛を引割るやうな小つぽけなことをあまり八釜しく爭ふた結果、多くの宗派が出來たのである。だが讀者諸君に記憶して貰はなければならぬ。此は決して眞の宗教の過失でなく宗教を說く者の過失であることを。

今一つ言ふべきことがある。眞の宗教の要素たるべき眞理は人間の最高最美の生活に必要欠くべからざる性質のものでなければならぬ。またそれほど偉大でなければならぬ。數學の眞理や植物學の眞理や地學の眞理は、それらの科學に取りては偉大であり又根本的のものであらうが、これを移して宗教の基礎とすることは出來ない。人間の靈的生活の土臺とすることは出來ない。これらの科學の眞理と宗教とは別ものである。だから或人は科學の事は全く知らないでも、宗教的生活を送ることが出來るのである。

吾人はこゝに一大困難に遭遇する。そは充分に了解し得ないからといふて、宗教上の根本的眞理を承認しない人の多いことである。よし道理には背かずとも、充分明かに合點し得ないことは信じられぬといふ。これが則ち困難な點である。彼等は宗教上の問題に就いて充分に理解し又は思考し得ない事に出會ふと、直ちに之を斥けてしまふが、實は思想上他の重要な事柄に就いては自ら氣

付かずに之と同様の事を承認して居ることがある。彼等は全くこの事を忘れて居る。思想上の重要なる範圍に於ても、彼等の欲すると欲せざるとに拘はらず、充分に理解し得ないことを、承認せざるを得ないことがあることに、氣付かない事が往々ある。唯宗教上の問題に就いてそのやうな事に出會ふときに限つて彼等は躊躇したり、立ちとまつたり、逡巡したりする。遂には後戻りして彼等が充分了解し得る異つた性質の小さい思想の區域内に籠城(たてこも)つてしまふ。これは確かに自家撞著である。かくの如き自家撞著な態度を取る自然の結果として彼等は宗教に遠ざかるのである。嘗て信じて居た宗教をさへ棄てゝしまふ。若し宗教が絶えず生命を與へる筈のものとすれば、宗教は最も偉大にしてまた最も根本的なる靈的眞理を提供せねばならぬ。若し宗教がこの事を爲さず、小さな吾人の心意で了解の出來る小さな思想のみを提供するものとすれば、宗教はその効力を失ふであらう。若し宗教が人生を補益するところの能力を失ふた

ら、最早存在の價値はなからう。基督教における偉大なる生命と能力の秘密は左の事實に基いて居る。即ち此宗教が無窮なるもの、人間の理會力を超越したもの、絶對無限のものに向つて驀進することを敢行した點に存するのだ。

つら〳〵人間の要求を詮索して見ると、その要求を充たしていつまでも永續し得る宗教に少くとも五個條の偉大にして根本的な思想があるやうに思ふ。その五個條を擧ぐれば左の通りである。神は萬人の父たること、世界人類は咸な同胞兄弟たること、神が宇宙を支配したまふこと、神は心靈上の指導者たること、あらゆる人間が終に其救を全ふせんといふ光榮ある希望、即ちこれである。

これらの觀念は悉く完全な宗教に必要なものである。又これらの觀念は全く合理的に説示されんければならぬ。その中の一つでも省略されてはならない。これらを一纒めにすれば、あらゆる宗教上の根本眞理の一般的説述は、おのづからその中に發見されるのである。あらゆる人間の義務はその中から發生し心

靈のすべての道義的若くは宗教的要求はこれに由つて供給されるのである。その事は、吾人が次ぎの紙面に於て今一層詳しく上掲の根本眞理の一つ〳〵に就いて論述するに隨つて、追々明白に理解されるだらうと吾人は信ずる。

吾人は特に讀者諸君の注意を惹きたいことがある。それはこれらの根本的眞理は人間の知力を以て充分に理會することの不可能といふ一事である。左りながら現在及び將來に於て盛んに活動するところの宗教には是非共これらの要素がなくてはならぬ。五つの中その一を缺いてもそれこそ著しい缺典を生ずるのである。これらの要素は合理的であり且これを維持すべき相當の證據があるから、知力に限りある我々人間の取るべき態度は唯これのみである。即ち吾人の思想が達し得る點まで了解し、吾人の理解力の到達し得ざる部分は信仰を以てこれを承認することである。此の理解力の到達し得ざる部分といふは決して道理法に背反するものでなく、たゞ吾人の理解を超越した點である。それだから

活力ある宗教は、偉大にして根本的なる宗教上の眞理に基かねばならぬことが明瞭である。かくの如き宗教は必ず合理的であるから、上述の如き眞理の上に立つて居る宗教でなければ、合理的といふことが出來ぬ。而してこれらの眞理は永久のものであるから、その眞理に基いて居る宗教も亦永久に存續すべき筈である。

二、活きた宗教は人の行爲を指圖すべき力がなければならぬ　永存する宗教は人間の行爲の指導者でなければならない。世間には宗教を以て冷かな主知說（人の知力のみに訴ふるもの）と爲し、或は一教義と爲し、また神學其ものと同樣に考へて居る輩がある。上文に述べた根本的眞理をたゞこの方面からして維持しやうとするものもあるが、それは失敗だ。またこれと反對に宗教を單なる感情と爲し、恍惚たる一場の悅樂と見做して、主情說を唱ふる連仲があるが、これも亦誤りである。冷かな主知說と溫かい主情說との中間に、宗教を以て人

間日常の行爲を支配すべきものであると主張する人達がある。その立場が最も堅實であると思ふ。行爲は人性の四分の三を占めて居るといふ諺がある。人が此世に處して他の同胞との間に生ずる有らゆる關係は、或る性質の行爲を生ぜざるを得ない。若し宗敎が人間の爲めになり人生に効用あるものとすれば、人生の此の大なる部分を不問に措いてはならぬ。若しこゝに眞に宗敎的の人物ありとすれば、その人の宗敎は、商人として、雇主又は被雇人として、市民として、隣人として、夫として、父として、將た兄弟としてその行爲全體を支配するであらう。

活きた宗敎は人間に向て忠實に且立派に、すべて其社會上の關係を完ふし、すべてその社會的の義務を果たすことを要求する。此世界に於ける政治上の騷動を鎭撫し、人間各自及び相互國民の關係より生ずる大問題を解決するに當つて、宗敎ほど勢力あるものは他にない。宗敎の根本的眞理を應用して、始めて

此の如き難問題を解決するを得るのである。これ實に宗敎特有の力である。宗敎は人間全部を支配し、其人格を支配し、且その爲すところを支配せねばならぬ。又宗敎は有らゆる國民、有らゆる社會を支配し、その精神を以て有らゆる人間の制度を統御しなければならぬ。宗敎が當然占むべき範圍はかくの如きものである。これよりも狹く小さくすることを容さない。看よ宗敎が爲し遂げんとする事業はかくの如く偉大で、又かくの如く困難である。しかし世界に於ける宗敎の使命が完成せらるゝまでには、必ず之を成遂げなければ止まない。斷じてその事業を縮小することを容さぬ。

活きた宗敎は人生の全體をその範圍内に包含し、あらゆる人間行爲の性質を決定しなければならぬ。

此指導は幾分か訓誡として與へられて居る。しかし吾人はあまり訓誡に依賴しないやうに注意せねばならぬ。左もなければ吾人の宗敎は機械的になり又細

工的のものとなる虞がある。訓誡を重んずる宗教は早晩禮法の一種に過ぎないものになつて仕舞ふ。此の如き衰微の狀態に陷らうとして居る證據充分なる宗教が、今の世界にはいくつもある。品性を養ひ行爲を指導するには、時代と國柄の相違に拘はらず、各人が能くその銘々の異つた境遇に適用し得るところの活きた眞理と一般的原則とに據らねばならぬ。イエスがその教を垂るゝや、正さに此方法に由つたのである。即ち彼が與へた行爲の規則は人が如何なる時、如何なる場所に居つても、また自分の地位職業がどうあつても、服膺し得らるゝやうな一般的原則である。『此の故に凡て人に爲られんと欲ふことは汝また人にその如く爲よ』(太七〇一二)といつた教訓は正さにその適例である。彼は人の罪過を容すときは七度を七十倍せよ(太一八〇二一、二二)といつた。彼の立場よりいへば愛は人生の法則である。此の故に彼はかう教へて居る。いはく『汝等の敵を愛み汝等を詛ふ者を祝し汝等を憎む者に善きことを行へ』(太五

〇四四)と。看よ彼の教訓は人間の關係の奥底に貫徹するところの宇宙的大原則に基けることを。言ひ換ふれば、時代・國柄・境遇の如何に拘はらず、之を服膺し、之に信賴して毫も差支なき教旨なることを。

左れど訓誡と原則を以て宗教の本領を悉したものとはいへない。人間は更に一段完全なるものを要求する。人は或實例を求めて止まない。その實例とは必ずしも雄辯な說教に由つて吾人を深く感動し得る人といふ意味ではない。寧ろその人の生涯がその人の說くところを證明するに足る人物である。說教に就いて長い經驗を有つて居る人が近頃かう言つた。貴君が說教するとき、聽聞者は僅か四十人であるかも知れないが、貴君が說いたことを日常生活に實現しやうとして居るかどうかと、日々氣を付けて觀察して居る者は二千人もあらう』と。誠に味ふべき言だ。最も良く吾人を指導する人はその言ふところを躬行實踐する人である。其身に體して然る後之を人に說く。故に其言に千鈞の重味がある

のだ。イエスの偉大なる點正しくこゝにある。イエスは吾人に最高の理想を與へた。また有らゆる境遇における有らゆる人間の行爲の各方面を包含するところの原則を與へた。そればかりでなく、彼はその品性と生涯に於て理想そのものを實現し、原則そのものを實行した。以上の諸點に於て宗敎と同化したイエスは人間の行爲に就ても必要な指導を與へた。彼は道を啓示した。彼は義務の道を示した。凡そ彼の敎訓を承認する者は彼等が何を爲すべきかを知ることが出來やう。凡そイエスの敎に從ふ者は岐路に彷徨ふ心配がなからう。

三、活きた宗敎は生命を與へなければならぬ　人が眞理を悟り義務を知つたといふ丈では充分でない。更にその義務を果たす能力を有たねばならない。さうだから活きた宗敎の第三の要素―恐くはその最大の要素は生命を與ふることである。自然界では生命は即ち發生である。生長の止まつてからは消耗した部分の回復にとゞまるであらうが、發生の作用は依然として續いて居る。人間

に於ては生命は氣力である。生長と進歩は即ちその結果としてあらはれるものだ。現代の文明世界は知識を要素するがそれよりもモット多く生命力を要求して居る。人として自らの義務を知らないものは寡い。能く知りながら爲さないのが世間の通患である。善を爲すべき力が足りないからである。不道德な人間でも正しい生活法を能く知つて居る。彼が送つて居る生活よりも高尙な生活法のあることを能く承知して居る。彼はこのやうにしてはならぬといふことを百も承知して居ながら、惡いことを止め得ない。要するに彼は誘惑に克つて自分で善いと知つて居ることを實行する力が足りないのだ。官廳や役所などが腐敗して賄賂が盛んに行はれて居るのは官吏輩がモット高尙な遣り方を知らない爲ではない。善いと知つて居る通りを實行する力が足りないのだ。こんな場合に必要なものは義務に關する知識よりも之を實行するところの力である。正義を踏み行ふところの不撓不屈の意力である。かくの如き意力を生ずべき生命の力

が必要だ。この要求を充たすのが宗敎の目的である。イエスはこれを認めて居たから、地上におけるわが使命は茲に在りと宣言した。彼はいつた。『わが來るは世の人をして生命を得せしめんが爲なり』と。この故にイエスは世界に生命を與ふる爲に來られた御方だといはれて居る。生命は何時も力である。キリストが與ふる生命は吾人が理解し得る最も高い正義の理想に從つて生活すべき力である。

以上述べたことが即ち活きた宗敎の要素である。活きた宗敎は根本的な宗敎眞理に基いて居る。行爲を指導し生命を與へる力である。更に簡明にいへば活きた宗敎は合理的である。道德的に人を動かし、又靈的に力あり辨識あるものでなければならぬ。人間の爲にすべてこれらの事を爲し得る宗敎は決して衰へない。又世界におけるその地位を失はない。かゝる宗敎は現在の爲に活きた宗敎であり、又將來の爲にも活きた宗敎であらう。

上來述べ來つた吾人の目的は活きた宗敎の要素を列擧し、次ぎの諸章に於て一層詳密に論じやうとする思想の道筋を示さうとすることであつた。かゝる宗敎が近代思想と如何なる關係を有して居るか。夫に就いてたとひ一言でも費すことは全く餘分なことで、無用の徒勞であるやうに思はれる。若し近代思想が眞であり又完全であるとすれば、此宗敎はその思想の緊要な部分でなければならぬ。何となれば吾人がすでに前節に述べた通り、この宗敎が眞理に基いて居るからである。近代思想といへば、世人は何となく一種の魔力でゝもあるものゝ如く思ふて居るが、何人もその意義を知らないやうに思はれる。いかにも漠然として曖昧な語である。吾人の思想が近世的かどうかといふことは、その思想が眞なるや否やといふことほど、吾人に取つて大切でなからう。所謂近代思想の中に眞理もあらうが、またどれほどか皮相だけのこともある。今でこそ人氣に投じて居るやうであるが、窮極の試驗を經て見ると、その缺點も明かにならぬ

う。左ればある事が近代的であり且人氣に投じて居るといふ事實は、必ずしもそれが眞であり善であるといふ證明にはならない。誤謬と迷信とを打棄てゝ過去の眞理を採り、愚昧の點を去つて現在の眞理に就き、絶えず新しい境界に進まんとする心意は、いつも近代であり進歩的である。この章に說明された宗敎は此の如き心意の宗敎である。その宗敎は進歩的で、でき得るかぎり多くの源泉から眞理を吸集し、且その思想が眞である限り、近代思想とも常に調和するのである。

科學藝術又は哲學に於て專門家たらんことは宗敎家の任務でない。但し學問の他の方面に於て、根據を固ふした重要の眞理を採つてこれを參考し、其思想をこれらの諸の眞理に適合せしめることは、宗敎家の宜しく爲すべき事である。同時に宗敎家は宗敎の方面に於ける專門家たることを要求すべき權利がある。此點に於ては他の專門家が宜しく宗敎家に傾聽すべきである。宗敎家も他

の問題に關しては夫れ〳〵の專門家に傾聽したのである。予の所謂宗敎とは靈的生命である。宗敎家にして力倆あり且研究者の態度を失はないならば、彼は世界の思想の總額に對して一貢獻者たる權利がある。世界の思想は他の諸專門家の貢獻と共に宗敎家の貢獻に由つて形造らるゝものである。宗敎家も確かにその權利の一部分を要求し得るのである。かくの如き高き要求を爲し得る宗敎は必ず上述の如き要素を具へなければならぬ。その出處の如何を問はず、眞理の系統中に一地位を占めねばならぬ。科學たると、哲學たると、宗敎たるとを論ぜず、眞理の系統中に一地位を占むる者は、進歩的であり、近代思想中の眞なるすべてのものと調和し、且その思想の重要部分を形造らなければならぬ。吾人は信ずる、次ぎの諸章中に說示されんとする宗敎は以上の要求に適應して居る。故にその宗敎は生命あり發展する所の宗敎である。又常に近代的の宗敎であることを吾人は信ずる。

第一編　活ける宗教は眞理に基かねばならぬ

第一章　神は萬人の父たること

神が萬人の父であるといふ此の短い句の中に、基督教の全體が表示され、又包含されて居るやうに思ふ。此の句にあらはれて居る思想が眞理であるとすれば、自餘の部分はすべてその中に含まれて居るのである、これはキリストの啓示にあらはれた根本的の觀念である。即ち中心的思想である。他のあらゆる思想はこれより發し、他のあらゆる教訓はこれと適合して居る。神が萬人の父であるといふ思想と氷炭相容れざる觀念は、たとひ如何なる觀念にせよ、基督教的のものでない。如上の思想を眞理と承認した以上、これと相背馳せる觀念はキット虛妄だ。眞理はすべて神から發するものであるから、必ず神の性質と調

和すべき筈である。

『神は愛である』（約翰第一書四〇八）。左れば神の性格の基音（キーノート）は愛なのである。神が萬人の父であるといふ此の宗教に基くあらゆるもの、即ち實際神から發するあらゆるものは、必ず愛と調和しなければならぬ。吾人が人生の事實を解釋するに方つて、永久の愛と調和する解釋を見出すまで、孜々として研究することは、吾人の職務である。吾人はキット此の如き解釋法を見出し得ることを信ずる。

神が萬人の父であるといふことは基督教の中心的觀念であり、且すべてを包含する觀念であるばかりでなく、更にこれを擴充して見ると、あらゆる宗教的眞理の最大觀念である。後の諸章に由つて讀者諸君の知らるゝ如く、人類のすべてが同胞なること、人の心靈が洩れなく最終に救濟せらるゝことは、此の觀念から發生する結論で又その須要な部分である。かくの如く考察し來るとき

は、神が萬人の父であること、人類皆同胞なること、及びあらゆる人の心靈が正義と幸福の中に最後の勝利を得ること、即ち以上の三大要點は嘗つて人心に生じた最大思想であることに異議がなからう。これらの思想はあまりに廣大であつたから、始めからその全體を世界の人間に知らしめることができなかつたのである。太古野蠻な人民等の心中に存してゐた曙光は、此思想に比べると實に小さかつた。その當時彼等は、彼等が有つて居つたものよりも更に高尚な思想を承認し得なかつたのである。吾人は今爰に此の觀念の發生即ち進化の痕跡を尋ね、併せてこの觀念が人間に與へらるゝに至つた漸進的の啓示に就いて記述する餘白がない。これは非常に興味ある題目であるが、これを說明するには別に一冊の本を書かなければならない。爰には單に舊約聖書の中に神が萬人の父であるといふことが表示されて居ると述べて濟まして置かう。文明の進歩が可なり著しくなつたこの時期に於てさへ、父といふ意義が認識されなかつた

創世記の著者は神が左の如く言はれたと記して居る。『我等に象りて我等の像の如く人を造らんとて神はその像の如くに人を創造りたまへり』（創一〇廿六、廿七）。モーゼは叛逆を謀つた人民に向ひ、『愚かにして智慧なき民よ。汝等主に報ゆること此の如くなるか。彼は汝等の父にあらずや』と言つた（申卅二〇六）。後世の預言者等の中にも神に就いて是と同樣の言ひ方をして居るものがある。然し彼等同胞國民以外のものを、神の族の中に加へやうとしたかどうかは、議論の分かるゝ問題である。

『時至りて』世界がその用意を整へた時になつて、この啓示があらはれた。此の大いなる眞理を充分に深く且廣く啓示することはイエスの任務であつた。彼の宗教の神髓である山上の說教を一貫して居るインスピレーションが即ちそれだ（馬五、六、七章）。イエスが敎へた模範的の祈禱は『我等の父』といふ詞で始まつて居る。彼はまた『天に在ます父の完きが如く』完くならんことを、其

弟子等に勸められた。『人々が汝等の善き行を見て天に在ます汝等の父を榮むるやうに汝等の光を耀やかせ』と彼等に告げられた。實際神が人類の父であるといふ觀念が取り去られたとすると、山上の說敎は支離滅裂になつてしまふのである。ジエーコールマン・アダムス博士は言つた。『この金絲は夫の說敎の光彩陸離たるあらゆる文言を貫いて居る。神が父である事實、人とその創造者との間に存する密切の關係は從順、犧牲、克己若くは獻身の根據として主張され・反復され・且詳說された。人は神の子であるといふことが終始肝要の事實となつて居る』。吾人が此の說敎のことをかく委しく述べたのは、これが基督敎の全體を代表して居るからである。吾人がこれから彼の生涯と事業を究めやうとするに方つて、吾人は暫らくも此の根本的觀念を忘却してはならぬ。キリストは神が萬人の父であるといふことを宣言せん爲に此世界に來られたのである。この觀念は彼の生涯の原動力であつた。

人は各自に神と親戚の間柄であるといふ表象を具へて居る。人は天父に肖て居る。ある人に顯はれて居る表象は極めて微かである。またある人々には罪の生涯の結果が印せられて居る。兎に角その表象は何人にもあらはれて居る。少くともすべての人間は理解力と道義的觀念と愛とを具へて居る。要するにあらゆる人間には修養することのできる靈的存在者たる元素がある。即ちこの靈性の元素は人間が神から得たものである。これは人が神に對して子たる關係を有つて居る爲めである。神は創造者である。しかし父であることは創造者であるといふことよりも意味が深い。人はある器具若くは機械の創造者即ち製作者になることができるが、眞の意味に於てその父であるとは言はれない。人は其機械に己れの天性又はその生命の一部を與ふることはできない。その機械を組織して居るものは物質である。吾人は爰にこれを詳論する暇はないが、一面から見れば神はあらゆるものゝ創造者である。しかし人間の心靈からいへば神はそ

の父である。そは神が自らの生命の一部を人間にのみ賦與し給ふたからである。人間靈性の資質は――神の性と其種類に於て同一である。人の靈性は神から生れたものであるから、人は神の子供である。かくの如く神はあらゆる人類の父であつて一人の除外例もない。その中には甚だ惡い子供等があるかも知れないが、彼等も矢張り神の子供等であつて、我等の父に愛されて居る。その子を愛することが母の天性である通り、人を愛することは神の天性であるから、神は人を愛せられるのである。神がキリストを世に遣はし給ふたのは人がかやうな大なる賜物を受くるに足るほどの事をした爲めでなく、神が人類を愛してこれを救はんとし給ふた爲めである。ヨハネいはく『それ神は其生たまへる獨子を賜ほどに世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信ずる者に亡ること無して永生を受けしめんが爲なり』（約翰福音書三〇十六）。『イエス答て曰けるは爾もし神の賜と我に飲せよといふ者の誰なるを知ば爾われに求めん。然ば活水を

爾に予ふべし』（ヨハネ傳四〇十）。神の智慧は限りなく、其能力も限りなく、その他のすべての性質も亦無限であるが、最も仕合せなことはその愛の廣大無邊なことである。彼の本體のあらゆる性質や彼の攝理のあらゆる行動はその無限の愛の表明である。これは神の啓示の至極である。人が神に就いて得た最高の概念である。善かれ惡かれ神は優さしい而も聰明なる父の愛を以てすべての子供等を愛し給ふ。神は罪の外に何をも惡まれない。罪はその子供を害する故に、これを惡まれるのである。

性質からいへばあらゆる人間が神の子供等であるが、或子供等は他のものに比べて一層完全に神の子供等である。これは重要な區別である。これを充分に認識し得ない者があつた爲めに、基督教世界は二大派に分れてしまつた。甲派のもの主張していはく、人間は性來神の子供でなく、寧ろ墮落したものである。たゞ新たに生れ更はることに由つて神の子になることができるのである

と。乙派の立論は大にその趣を異にして居る。あらゆる人は神の子供等であつて神に愛されて居る。新生に由つて人は神に對する子たる關係を認識し、子たる意識の一段高い程度に達するのである。爰にある善人に二人の息子ありと假定しやう。其一人は物の道理の分り初めた頃から不孝の子であつたが、長じて益々惡くなり罪の生涯に墮ちた。性質も品性も彼はその父と全く異つて居る。しかし彼はその父の子に相違ない。他の一子は孝順で父と同じやうな高潔な人物になつた。彼は惡い方の兄弟よりもズツト能くその父に似て居る。この高尚なる意味で、彼は一層完全に父の子である。自然の關係からいへば兩人共夫の善人の子であるが、孝順と品性の上から見れば、一人だけが眞の息子である、此の如くあらゆる人が神の子であるが、その子たる關係には程度の相違がある。

新約聖書にはこの區別が判然として居る。吾人はすでにキリストの詞を引用した。即ち一般の人類を指して神の子供等と呼ばれた詞である。他の一面では

ヨハネは『彼を接けその名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲せり』と吾人に告げた。これ取りも直さずイエスの教を信じて之に從ふ者を指したのである。イエスは是等の者にインスピレーションを與へ、又一層高い關係即ち從順な子たる關係に立入るべき權能を與へられたのである。パウロいはく、『凡そ神の靈に導かるゝ者はこれ即ち神の子なり』と（羅八〇十四）。パウロは何人をも除外する考はなかつた。若しあつたとすれば、彼は自家撞着である。彼は『神即ち萬人の父は一なり』と（以四〇五、六）いふて居るからである。一方には萬人がその靈性に由つて神の子等であるといふ事實に關した多くの詞があると同時に、他方には靈の力に由つて一層大きい從順なる子たる關係に進み、性格の中に神を臆念するといふ境涯に入つた人々に關した諸節がある。若しこの相違あることを覺えて居れば、少しも矛盾はない。要するにこれらの語句は父の性質を諸君に啓示するものであるといふことを知るべきである。吾人は再び

アダムス博士の語を引用して予がこれまで述べ來つたことを概括しやうと思ふ。『人は徹頭徹尾神の子である。人は神の像に形どつて造られ、神の愛に由つて創造され、神の保護の下に育てられ、訓練や教育に就いても慈悲深き攝理の目標であつたといふ意味に於て然りである。然し人が天父の愛に復へることを求めて、孝順を盡すに至るまでは、唯不信實にして虛僞、迷ふて墮落した放蕩兒に過ぎなかつたのだ。彼はまだ眞實善良な子たることができなかつたのである。神はあらゆる心靈の父であるから、各々その子たる關係を承認して孝道を盡す者に對して殊更親密な態度を持せらるゝのである。此事實に徵してパウロの言つた通り『神は萬人の救主であるが、とりわけ信ずる者の救主』(提前四〇十)であるのである。

神が萬人の父であるといふ教理は極めて大切である。次ぎの諸章の中に屢々あらはれる基本的眞理である。これを標準としてあらゆる論說を試驗するし、

又この大事實と適合するや否やに由つて、論者の立場が維持されたり倒れたりするのだ。吾人は今や此教理の最大なる實際的關係に就いて考究して見やう。蓋しこの教は人生に於ける至大の實際的原動力であるからである。

萬人の父の慈悲仁愛は、世の中の他のすべての方法が効を奏し得ない場合にも、人を悔い改めさせる。パウロ曰く『神の仁慈(めぐみ)は汝を悔改に導くべし』と。力は反つて惡しき者を反抗させる刺擊となるが、愛は最も剛愎な者の心情を融かすことができる。威嚇は反對を起し、愛はすべての者を征服するのである。愛はまだ全勝を得たのではないが、終にはこれを占め得る。最も剛愎な最後の罪人をも悔改めさせ得るであらう。この方法を刑事上の犯罪者の監理の上に試みた人々の經驗に徵して見るに、犯罪者の生涯に及ぼす愛の感化力の優越なことに就いて多くの例證を發見するのである。終身禁錮に處せられた人々が彼等を愛して親切に取扱つてくれた番人の爲に一身の自由を犧牲にしたことがあ

る。此類の例を多く列擧することは餘白が容さないが、爰に他の種類の一例を擧げて見やう。或る日曜日の晩聖人のやうに高德であつたバッターソン博士が牧師をして居たボストンの同仁教會へ一人の惡い婦人が入つて來た。彼が來たとき、博士は神は萬人の父であること及び罪ある子に對する神の愛に就いて說教して居つた。博士はこの異樣な樣子の婦人が入口の戶の側に坐つて居るのを見て、禮拜のすんだ後で會つて見やうと思つたが、婦人は逸早く出て往つてしまつた。然るに其翌日彼女は博士を自宅に訪ふてから言つた。『私は惡い女です。私はあらゆる誡を破りました。私は罪といふ罪を悉く犯しました。昨晩私は此上どんな惡事をする機會があらうかと考へながら、貴下の教會へ參りました。牧師等はいつも私に神の怒に就いて話し、來らんとする怒から遁れることを私に警告した。其爲私は反つて神に逆ふ氣になつて、愈々深く罪に陷りました。然るに貴下は神は私の父である。彼は私のやうな大罪人をも愛したまふ

ことをお話しになつた。此事は果して本當であらうか私に教へていたゞきたい。私は貴下の仰せの通り信じてよろしいのでありますか』。バッターソン博士はそれに違ひがないから、彼は其通り信じて差支ないと言ひ聞かせました。そこで其婦人は申しました。『それでは私は私の罪を悔改めます。私はかやうな神樣に不從順であつたことを深く愧ぢます。私はこの後善い生活を致しましてわが父の旨に從ひましやう』と。彼女は其言の通り實行しました。永い間有益な基督者の生活を營みました。他の事柄は一切効果を奏さなかつたけれども、神が彼女を愛する父であるといふ一事は彼女を悔悛させ改善させる力があつた。

この事は人が神に對して深い關係あることを知らしめ、且甚大の責任あることを自覺させるのである。これらの責任の一つは從順である。子たるものが兩親に從ふ義務あることを吾人は容易に承認する。吾人が子に教ふる最初の學課

の一つは即ちこの義務を感ずることである。子がその父に從ふのは彼が自らの父であるためである。その理由は明白である。父の優つた智慧と經驗及び彼の親愛と懇切とは、子を父に從はせる强い理由である。神と人との關係も亦これと同樣であつて、唯その度合の極めて高いばかりである。それだから子が此の世の父に對する最大義務が從順である如く、一層强大な理由の下に、神の子がその天父に對する第一の義務も亦從順である。

神が父であるといふことは、父の旨を行ふことを人生最大の理法たらしむる基礎である。イエスはこれを彼の絶高の規矩(のり)とした。イエスいはく『わが來りしは己の意のまゝを行はん爲めに非ず我を遣はしゝ者の意(こゝろ)のまゝを行はん爲めなり』(約六〇三八)。『我を遣はしゝ者の旨に遵ひその工(わざ)を成し畢るこれわが糧(かて)なり』(約四〇三四)。

或人々は銘々好むところに從つて恣まゝに行ふ權利があるやうに思つて居

る。また彼等が罪を犯したいなら、罪を犯す權利さへあると考へて居る。彼等は勿論罪の結果を蒙むることを辭さないのである。しかし彼等に此の如き權利のないことは明瞭である。人間が神の子であるといふ事實は、神に從ひ神の思召を奉行すべき義務を生ずる。親に對する孝道を我等と神の關係に適用して見ると、あらゆる正義を行ふべき義務は茲に生ずるのである。

次ぎに起る子たるものゝ義務は感恩である。兩親を輕蔑したり冷遇したり或は窮乏の場合に彼等を世話しない不孝の子に對しては、吾人は殆どこれを譴責すべき言葉を知らないほどである。兩親は人の助けなしに何事を爲し得なかつた時に彼を世話した。彼等は又彼を撫育し、彼等の有てるすべてのものを彼に予へた。即ち彼等は最も深く彼を愛し彼の爲めに幾多の苦勞を重ねた。然るに年頃になつて全くその恩義を忘却して何等報いることをしない。兩親の厚情と愛は子の心に斷えざる感恩の念を起すべき筈である。若し天父の無限の愛と祝

福を享けながら、これに對して毫も感恩の情なき人があつたとすれば、吾人はその人について何と言ふべきであらうか。吾人若し此世の兩親を等閑にした者を責むべしとせば、天父に對する背恩の人は更に一層責むべきでなからうか。これよりも尙甚しき人あり。そは神の彼に與ふるところは充分でない。神が彼に與へた生涯は際限なき好運を伴ふにも拘はらず、これを價値なきものと考ふる人である。神に對する忘恩は最も廣く世間に行はれる罪惡の一つであつて、また他の多くの罪惡を生ぜしむる根源である。神の父たることがこの人生に實現されて、深奥なる感恩を起さなければならぬ。その感恩こそ幸福の扉を開くべき黄金の鍵である。

世間には『自分の了簡次第で宗敎の事は等閑にしても差支がない。さうするのは予の權利である』と言ふ人がある。口にはいはずともさうした態度を持つて居る人がある。しかしこれは明かに彼等の誤りである。宗敎とは神と人とに

對する吾人の義務を果す中に神に報恩の生活を營むことである。人はこの義務を等閑にする道德上の權利がない。人間存在の事情そのものが各人をして天父に對する義務を負はしめるのである。即ち『心を盡し精神を盡し意を盡して』天父を愛し、これに奉仕する義務を負はしめるのである。

神が萬人の父であるといふことは、あらゆる人間に神性があるといふことを包含して居る。吾人の心靈は神から生れたものであるから、神の性情を具へて居る。吾人は全く墮落してはゐない。吾人は注意に價ひしない蟲螻のやうなものでない。人は各々その內部に神性を宿して居る。げに人は神に肖て居る。神に肖るべき可能性を有つて居る。人は愛の中に、智慧の中に、德に於て、將た幸福に於て、限りなく發育し得べき可能性を具へて居る。人はその神に肖んとする性情をどこまでも增進せしめることができる。神の子として立ち得ることは人に取つていかばかりの光榮であらう。個々の心靈はいかにも貴いものであ

り、隨つてその幸福の爲めに努力するはいかにその甲斐あることであらう。吾人がこの事を考ふるに當つて詩篇の作者と共に歡喜の聲を發せざるを得ないやうに思ふ。『世の人はいかなるものなれば、これを聖念にとめたまふや。人の子はいかなるものなれば、これを顧みたまふや。只少しく人を神よりも卑くつくりて榮と尊貴とをかうぶらせたまへり』(詩八〇四、五、)。

心靈の神性は神から獲來つたものである。天父は人格に聖き性質を賦與されたのであるから、人は皆これを尊敬しなければならぬ。あらゆる人格には、最も親密な友人と雖も、侵し入ることのできない一の境域がある。この境域は神聖なもので、神と己れのみで他に何人も入ることを許さないのである。

オベリン大學のキング校長は此問題に就いて極めて適當な說明を予へられたから、予は氏の言を玆に引用したいと思ふ。『他人の人格は之を神聖に尊敬すべき筈である。要するに眞實神聖なものは唯一つ。即ち人格である。あらゆる

場所や事物の神聖も、其源に溯れば、人格から發して居る。基督の敎の礎を成して居るものは人格に對する崇敬である。人は皆神の子であるから、人を人としてこれに恭敬を表すべきである。且又文明の最も眞實な發展は、人格の神靈に對する觀念の深くなつて行くことに於てのみ、之を見ることができる。一國民がいかにその婦女子や小兒や召使等を取扱ふて居るか。此事に由つてその國民の眞の進步を測量することができる。人類の道義的進步が一步を進めば、人格に對する恭敬の念も一步進んだのである。雇主はその被傭人を敬し、主婦はその女中を敬し、辯士はその聽衆を敬し、師はその生徒を敬し、親は其子を敬せねばならぬ』。人格の神聖を屢々汚損し破毀するものは粗暴にして無思慮の輩である。若し彼等が注意して人格を尊敬したなれば、人道の進步は大に捗取つたであらう。人格神聖の觀念を確立し、且これを養成したものは、人の神聖に對する信仰である。而してこの信仰は神が萬人の父であるといふ事に基いて

居る。諸君が街衢(ちまた)で出會ふ人、婢僕として諸君に事ふる者、學校で君達と一緒に勉學する青年、君達と共に工場で働く者、公けの議場で席を並ぶる人、或は同じ家に在りて君等と共に生活する家族、即ち生活上種々なる關係に由つて交るところのあらゆる人々は悉く神聖な人格である。諸君がこれらの人々の内部に神から獲られた神性の存することを認めた場合には、人格の神聖を感じない譯に行かないのである。

我等は悲哀のときにも、我等一同が同じ慈愛深い天父の子等であるといふことを知つて、大いなる慰藉を得るのである。我等の愛子等が病に苦み又は親に先立つて果敢ない最後を遂げた場合に、我等は斷腸の思ひをする。その時神が我等此世の父母に增して彼等を愛したまふ、彼等は神に保護されてゐるから、最早いかなる害も彼等に及びやうがないと想へば、我等は大に慰を得る次第である。此敎に從へば死も恐ろしくなくなる。死は朽つべき紐を解き放ちたまふ

天父の優さしい御手である。肉體が愛する子等の棲家(すみか)に適さなくなつたとき、彼等をその御側に迎へたまふことである。米國の詩人ホイッチアが、『永遠の德』と題した詩中に、この感想を美はしく言ひあらはして居る。屢々引用された句であるが左にその一節を掲げて見やう。

今は昔となりし樂しき家庭の聲を吾は聽きたく思ふ
消えて痕なき微笑に吾は懷かしむ
しかはあれど神はわが愛する者等を案内したまへり
神の御許にあれば彼等になど不都合の起るべき

"I long for household voices gone,
For vanished smiles I long,
But God has led my dear ones on,
And He can do no wrong"

吾人がこの項目に就いて述ぶるに當つて、是非とも忘るべからざる一事がある。そは我等が神の子であるといふことを認識する爲めに生ずる日毎の必要に應ずべき力である。一人の基督者が人生の戰に奮戰苦鬪して有らゆる他の援助が絶えたとき、神の子たる意識を有する彼は天を仰ぎ看て『わが助は神より來る』と言ふことができる。この意識は更に進んで戰はんとする勇氣を我等に與ふ。この意識は我等の弱きを忘れて我等の生命を限りなき者に融合せしめる。その無限者は我等の利益とならんかぎりは喜んで吾人を扶くるものである。

神が萬人の父であるといふことは人をして最大の關係を有せしむるものである。即ち宇宙の靈的根源に對して緻密の關係を有せしむることゝなる。但し此關係に由つて生ずる義務は良心の義務、從順の義務、感恩の義務及び愛の義務である。それと同時に人の心靈に神と神聖とを齎らす。又安定と力と慰藉と平康とを齎らす。以上は實際上の結果である。神人父子の關係はすべてのものを

包含す。そを信じ且之を生活することは最善にして又最も幸福なる生活を營むことである。吾人は此章を結ぶに當つて、マルチン・ルーテルの言を引用することを一番良からうと思ふ。『我等が神を思ふにつけて最善と思はるゝ名稱は父である。こは優さしい又美はしい人情に觸れた名である。父てふ名はその性質上優美(やさしみ)と慰藉とを自然に備へて居るからである』。

第二章　神を尋ね索むる道

ジョシュア・ストロング博士は其著『來らんとする大覺醒』の劈頭第一に論じて曰く『世界最大の必要は眞の神である。その神は恐くは在らんといふが如き漠然たるものでない。我はこゝに在りと宣ふ偉大なる神である。昨日の神でもなく又明日の神でもなく、今日の神である。留守中の神ではなく、確かに現在したまふ神である。巷にも、書齋にも、市場にも、商店の勘定場にも　製造場にも、常に吾人と共に在ましたまふ日々の神である。有らゆる我等の思想と行爲の内部に、最大の勢力ある原動力となりたまふ神である』。以上ストロング博士の述べしところは正しく現今の最大必要である。ピリポは嘗てキリストに『我等に父をあらはしたまへ、さらば足れり』と言つたことがあるが、今も尙同樣の叫び聲を聞くのである。無數の人々は『我等に神を示せ。我等に父を示

せ。我等はそれ以上何をも要求しない。それで足るのだ』と叫びつゝある。若し吾人が之を求むるところの態度、方向が正當であり、且その視力が充分ならば、吾人はその目的を達し得る筈である。少くとも吾人の心靈は神の實在によつて滿足することが出來やう。

先づ第一に吾人が見んと期待するものに就いて、或觀念を形造くることを試みなければならぬ。人は屢々神に遇ひながら之を知らずに居ることがある。又眞の實在とは全く違つたものを探がして居る爲めに神を見出し得ないこともある。神についての人の觀念は人の智慧の變化に順じて變はつた。十九世紀の一大懷疑論者であつたロバート・インゴルソールが嘗て『善良な神は人間の最高の作品だ』と言つたことがある。インゴルソールがかく言つた意義――又世人が概ね此語を讀んで會得して居るところは眞實でないばかりでなく、更に有害である。しかし意味の取りやうに依てその中に一部の眞理を發見することが出

來る。それはかうである。人間の智慧と文化が高まれば高まるほど、神についての人の觀念も亦高まるものであるといふことである。それ故に最も高尚な人は神について最も高尚な觀念を懷く筈であらう。人間は各自に有つて居る最高最善の觀念を集めて自然に神といふ概念を形造るものだ。左ればといふて神はたゞ人間の概念や理解力の中にのみ存在するものだと考へるのは間違である。實はその反對である。神は偉大なる事實即ち宇宙間最深の實在である。神は事實として永遠の昔から存在したのである。たゞ人が神を了解する上に差違があるばかりである。即ちその智力の多少、德性の高下に由つて神を理解する程度に差違を生ずるのである。人が神は善なりと信ずるやうになれば、そは最高の理解に達したものと言はねばならぬ。人として宇宙の永遠なる實在に最も能く接近したものと見ねばならぬ。

例へば太古の人間には唯一の神を概念する能力がなかつた。即ち神は一つで

なく多くあるものだと思つてゐた。またその神も千差萬別で、或ものは木石を神とし或ものは自然界の勢力や元素を神とした。文化の度がよほど高尚になつてから唯一神教が起つた。しかし最初の信仰に依れば、神は此世界からかけ離れた高い玉座の上から此世を主宰せられる統治者のやうに、又は大法官のやうに考へたのであつた。特に必要の場合だけには奇蹟を行ひもするが、平生は超然たる態度で人事に干渉されない、言はゞ不在ばかりして居らるゝ神であつた。思考力の進んだ人はかくの如き觀念に滿足ができなくなつた。次ぎに人は唯自然の法則を通ほしてのみ働くところの理法と力の神を信ずるやうになつた。此の概念は前のそれに比べて確かに一歩進んで居た。しかし吾人は神が人生に遍在したまふといふ一層高尚にして滿足なる觀念に進まなければならない。神は生命であり、智慧であり、德であり、愛である。神は宇宙の偉大なる窮極的事實であり、又人間の內部にあらはれたまふものである。神は萬事萬物

の中に活動したまふ。神は有らゆる生命が由て發生するところの一大根源である。吾人は神について上述の如き觀念に達しなければならない。

魚は水の中に生き動きまた存在して居る。魚は水の中に居るが水も亦魚の中にあるのだ。人間もその通り、人は神の中に存するが、神もまた人の中に在ますのである。我等は彼に賴りて生きまた動きまた在ることを得るなりとパウロはいつて居る。これ取も直さず神吾人の衷に在り吾人もまた神の衷にありといふ意味である。たとへば神は際限なき靈の大洋である。窮りなき靈の本體である。その中に吾人は存在することができ、それから吾人は出で來り、吾人はその一部分を形造つて居るのである。更に他の比喩を取つて見やう。或日吾人が海岸に立て一の大河が滔々として大海に注ぎ込む有樣を目擊して居ると想像せしめよ。滿潮の時には海水が盛んに押し寄せて河の方に流れ込んで來るが、干潮になると河水は何の抵抗も受けずに海に流れる。河がどこから始まつて海洋

がどこで盡きるであらうか。何人もこれを告げることができない。それもその筈だ。兩方から流れたり流されたりするのである。神の靈と人の靈即ち相互の交渉についても同樣である。そこに一の融合がある。神と人との境界線をハッキリと區劃することはできない。實はそんな境界線はあり得ない。成程神の人格は無限で、人の人格には限りがある。しかし此の兩者は融合一致するものである。本來の性質からいへば同一である。人の人格は神の人格と交り、神の人格は人の人格と交る。神は吾人の中にあり、吾人は神の中にあるのである。

古來神の人格は多くの人にとりて蹉跌の石であつた。人格の觀念を個人性といふ觀念と混同した爲めであつた。此の無限絶對の靈を個體として考へることは矛盾だ。そは個人性は必然限られたものであるからである。しかし人格はそのやうに制限さるべきものでない。別言せば限らるゝ場合もあり、限られない場合もある。吾人は

此點に於て個性と人格の間に大いなる相違のあることを知らなければならぬ。吾人は今少しく精密に人格の性質を吟味して見やう。

人格とは性格を形造くる諸の要素が結合して相俱に動作して居る狀態である。吾人が或人を指して彼は智能圓熟の人だといふが、その意味を質せばかうだ。德、愛、智慧などがそれ〴〵適度に發達して居るが、その中でも特に智能の活動が著しくあらはれて居るといふことである。吾人は又他の人を見て彼は愛に富んだ人格を具へてゐるといふ場合にも矢はりさうだ。勿論性格の諸の要素が備つてゐないではないが、特に愛の動作がきはだつて見ゆるといふのである。以上列擧した人格の種類の外にいろ〳〵の特色があるが、要するに同じ道理に歸著するのである。即ち人格の有らゆる相違は同一の要素の異つた配合と異つた聯結とに由るものである。愛にはたゞ性質又は性格についていふたので、制限の事は考へなかつた。人の性格を形造つて居る諸の要素には皆制限があり、且その結合の按排に圓滿なのがない。繰返していふが、人間の人格には限りがあり又其の釣合(比例)が完全でない。眞に圓滿で能く平均のとれた人は誠に寡い。吾人は人間の中に見出す要素と同じものを神に於て見出すのであるが、ただそれらの諸要素が無限で圓滿で完全な釣合(比例)を保つて完全に結合し、完全にはたらいて居るのを認める。だから神の人格は無限完全であるといはねばならない。性格のあらゆる要素が神にありては無限であり又その釣合や活動が完全であるから、吾人は宇宙間獨り神の人格のみを完全といふのである。かくの如くに理解して見れば、吾人は神の人格について惑ふ必要はなからうと思ふ。

人の生涯と性格とを極度まで高めんとする力のあるものは、神についての此觀念の外には何もなからうと思ふ。此の神の爲にならば人は自己を棄てることができやう。愛國の志士は妻子の爲め故國の爲めならその生命を惜まないが、

模糊たる哲理の爲めに誰れも自己を棄てるものはない。英國の碩學ジェームス・マルチノー問ふて曰く。夫の稅吏は(路加傳十八ノ十三參看)『人を正義に進むる一大勢力』に祈つた後で顏をそむけて悲痛のあまり胸を打ち、罪人なる我を憫みたまへと言ふたのであらうか。磔殺されし者の中に『ア、世の趨勢の潮流よ我汝の手に我魂を委ねん』と叫んで死の苦みを免かれんと欲したものがあらうか。かゝる場合に臨んで『父よ我はわが靈を汝に委ねん』といひ得たらんには忽ち一種温かき感情が油然として生ずるを覺えむ。救主がその惱みの秋に方りて『我は獨り居らず父われと共にあればなり』と宣ひしもまたこれと同じ。神が父たる人格を備へたまふといふ觀念の中には、人間に活氣を與へ慰藉を與ふる力あり。今や全世界は痛切に此の力を要求して居るのである。

オイケン教授は以上予が舒し來りし力を指して靈的生命(精神生活)と呼ぶであらう。かれが靈的生命といへるは即ち神の別名である。神は此の宇宙に充滿

するところの無限的・人格的・靈的の存在者である。彼は此の宇宙間に在まさざるところなく、また現はれざるところがない。我等が神を探し求むるは此くの如き靈的存在者の證據を索めるのである。吾人が神を見たらんときは、靈的の事物を見るのだと期待しなければならぬ。そは神は靈であるからである。

靈の事は靈を以て識らざるべからずとは吾人が聖書で讀んだ句である。吾人は靈的視力を以て神を見なければならぬ。そは靈的の事物を認識することのできる視力はこの外にないからである。

靈的の視力さへ透明であれば人は、自然を通ほして神に到達することができる。自然界にはある一定の通路がある――若し吾人が奥深く進みゆけば直ちに吾人を案内して神に接近せしめる通路がある。自然は統一して居る。どの通路から入つても同一の點に合する。一本の樹木でも充分これを知り悉したならば、宇宙を知つたのである。即ちその人は植物學を知つたのだ。種や類や屬

(Genus) や起源や更に進んでは植物の生命、生命そのもの、扨ては神を知つたのである。人が自然の一部を知悉するには、必ずその統一を知り生命を知り神を知るに至らなければならぬ。詩人テニソンは此の事實を美はしき語調で謠ふて居る。

石墻の裂目から生えいづる一輪の花よ
われはそもじを汝が裂目からもぎとる
根こぎ殘らずそもじをわが掌に收めぬ
小さき花よ吾若しそもじを了解するを得ば
根から花までそもじの何なるやを周ねく知るを得ば
吾こそ神と人との何なるやを知ることを得たらむものを

"Flower in the crannied wall,
I pluck you out of your crannies;—
Hold you here, root and all, in my hand,
Little flower,—but if I could understand
What you are, root and all in all,
I should know what God and man is".

此詩の作者の意は自然即ち神なりとふふたのではない。但し自然は神の表現の一部なりとふふたのである。

これまで科學研究の及んだ範圍でいへば、生命は、それより前の生命のありしことを除外て考へられないと斷言し得らるゝのである。だから此の地球上における生命の存在は更にその生命の源たる前の生命の存在を要求する。何ものでも無から有を生ずるものはない。有らゆる結果はそを生ぜしむるに足る丈の原因を有すべき筈である。生命を生ずるに足る丈の唯一の原因として吾人の知り得るは生命の外にない。換言すれば生命を生み出すものはやはり生命であ

る。ハックスリー教授が渡るべからざる淵があるといはれたのは即ち此の事である。此の淵に橋を架けん爲に學者等は大に努力した。即ち前の生命なくとも生命の生じ得ることについて說明を試みやうとしたが、遂に滿足に成功し得なかつたのである。若しそれが成功したとするなれば、そは神が働いて居らるゝ方式を他の新しい方面から示し得たといふに歸著したのであらう。既に世に知れて居る進化論は神がその事業を爲され今も尙爲しつゝある働の秩序ある方式を示したのと同じことであらう。吾人はこゝに於て一言を禁じ難いものがある。そは純粹のキリスト敎と眞の科學の間に何等の矛盾がないといふ事である。此の兩者はどちらも眞である。すべての眞理は互に調和するものである。

吾人が自然の觀察を深くすればするほど、いよ／＼確實に智慧ある第一原因に吾人を向はしめるやうに思ふ。サー・ウヰリアム・トムソン（ケルヴヰン卿）が『運動（Motion）の背後に精神（心意）を假定せざるを得ない』といふた。即

ち運動の端緒を明かにするを得ば宇宙の進化を知ることができる。しかし精神（心意）なしに運動の起ることをどうしても考へ得ないといふ意味である。ベルグソン敎授は精神を見るやうに吾人を敎へて居る。たゞその始めに於てのみならず生活の全體を通ほして之を見るやうに敎へて居る。彼は智慧ある創造的進化の時々刻々に行はれつゝあることを認める。これ彼にとりては疑ふべからざる神の表現である。

智慧の顯現はその奥に自らを現はさんとする智慧あることを要求する。又吾人は有らゆる結果には原因あることを知る。而して其原因はその結果と相似たる性質を具へ、且つそを生ずるに足るほどの力あるものでなければならぬ。吾人はもはや鳥の羽翼がその用法に適合して居ることから、此の如き用法に適するやうに工風した智慧がある筈だといふ舊い意匠論を採用したくない。假りにこれらの力は盲目的であり無智的であつたとしやう。それにしてもこれらの力

を指導して適當に働かしめるには智慧がなければならぬ。私の懐中時計の輪に刻(ギザ〳〵)を作る爲には特殊の機械がある。機械そのものには何の智慧もないが、その機械を考案して作るには智慧がなくてはならぬ。その如く前に述べた盲目的の力が自然の各部分を作り得たとしても、これらの無責任な力の背後には、その作業を指圖して組織あり智慧ある目的に副はしめるところの智慧が存在しなければならぬ。神は自然の中にある。決して留守なのではない。神は自然の中に遍在し、そを通ほして己をあらはすのである。彼は絶えず『創造的進化』を行ひつゝ、今も在まし、何時も在ましたまふたのである。

ボストン市のタフツ大學の教授であつた故(もと)のドルベーア博士は十九世紀における錚々たる科學者の一人であつた。彼は初め唯物論者であつたが、晩年に及んで翻然その説を變へた。その理由を述べた中に左の語があつた。わが畢生の科學研究は、原子(アトム)の狀態は智慧の存在を假定せずには到底説明されないものであるといふ結論に予を達せしめた』と告白した。げに原子(アトム)の狀態も宇宙の狀態も共に等しく智慧の存在を要求するのである。

英國のジョルヂ・ローマネス博士も卓出した科學者であつた。氏も亦多年唯物論者であつたが、自然を研究した末氏は篤く神を信ずる人となつた。氏は下の如くいふて居る。『物理學者も生物學者も力と生命の研究者も皆等しく敬虔の聲を揃へて神に告げていふ「アヽ父よ汝はいづこに在りや」と。岩石や波濤や草木花卉の中から應ふる聲あり「神こゝに在り」と。地は天に叫んでいふ「神こゝに在り」と。天は地に呼はりていふ「神はこゝに在り」と』。

以上列擧した人々は自然を通ほして神に到るの道を辿らうとして屆せず撓まず遂にその目的を達したのであるが、その外に同じ道を歩みながらその終極に達し得ずして中止したものがいくらあつたか知れない。左りながらこゝに一層直接でまた一段早く達し得らるゝ道がある。即ち人を通ほして神に到るの道で

ある。吾人は神の性格について、一層周到なる表現を人間の裏に見出すことができるが故に、此の道は更に安全な道だらうと思ふ。

英國の有名な懐疑論者はかう言つた。『予は常に主張した。諸君が聊さかでも哲學（純正哲學）に讓歩したとした場合には、取りも直さず神學に讓歩した譯になる』と。其意味はかうだ。毫も偏執なくして周到に行はれた人間についての研究は必ず吾人を導びいて神を信ずるに至らしめるといふのである。人及び其靈性の動作に關する智識が深くなれば深くなるほど、神に關する吾人の智識は豐かになる。獨逸の大詩人ゲーテも言つた。『君若し無限者を見出さんと欲せば、でき得るかぎり有限者に向つて突進せよ』と。有限者は無限者の端緒である。吾人の棲息してゐる太陽系統の中に二種の運動あることを吾人は知つて居る。第一は太陽をめぐる遊星の運動で、第二は太陽や遊星が擧つて、ある限りなき大軌道の共通的中心の周圍をめぐる廣大なる運動である。此の觀測のできぬほどに大きい第二の運動がどうして證明し得られやうか。此目に見えない外部の運動は見ゆるところの軌道を根氣よく觀測することに由て發見し得らるゝのである。永い時期の中に天體の位置に輕微なる變化を生ずることは、ある共通の中心點のぐるりを此の太陽系全體が運行するといふ事實を承認しなければ、どうしても説明の途がなからう。人間の心靈に關する或事についても吾人はこれと同樣の事あるを認める。吾人は心靈の特徴を觀察することができる。吾人は心靈が天に向つて進みゆかんとすることを知つて居る。その向上的運動は吾人が見ることもできず、又充分に了解することもできない高尚偉大なる或るものに向はんとして居る。かくの如く吾人は人間を通ぼして神に達せねばならぬ。心靈に關する事實に充分の價値あるものとすれば、吾人はこれ以外の結論に到達し得ないやうに思ふ。即ち人間の心靈は神に達すべきものであるといふのである。

人の著しい特徴は神の性格を現はし得る力である。人は自ら治むる力を有つて居る。人には意志の力がある。或程度までは意志の自由を有し又自ら創むる力を具へて居る。人は眞理に對する親和力のある心意を具へて居る。また人は道義心を具へて居る。愛と靈性とは又人に屬するものである。以上列擧した諸の性質と、爰に言はなかつた他の性質をも殘らず引きくるめて、これを性格と稱するのである。性格は神人共に有するもので、いはゞ人がどれほど神に似て居るかを測量する尺度のやうなものである。神は人の性格を舞臺としてこゝに働くこともでき、又それを通ほしてみづからをあらはしたまふこともできる。それだから吾人は人に於て最も明瞭にみづからを現はしたまふ神を見るのである。世界の靈眼が今や神を見やうとしてその視線を向けて居るのは全く此の點である。

小さな性格に於てよりも大きな性格に於て神は一段明瞭に見ゆる。大きいア

ークライト（弧光）の小さい白熱は電氣の二燭光よりも遙かに明るいし、又遠く照らすことができる。此の二つのものはどちらも同じ光線である。即ち電光だ。それとひとしく大きな心靈に宿る神の靈性は、小さな人の小さな心靈の中に微かに輝いて居る光よりも一しほ明かに認められ、又遠く照らすことができるが、同種類の神の光であることに於ては兩方とも變りはないのである。人が何ほど神を現はし得るやといふことは各人の力倆に由るのである。ロバート・インゴルソールはアブラハム・リンカンに就ての彼の大演說の結尾に於て『リンカンの性格は自分には說明ができない』と言つた。全くその通りだ。インゴルソールの無神論ではリンカンの性格を解することはできない。その祖先に溯つて見ても、その境遇を調べて見ても、リンカンを生み出すに足りさうな原因は一もない。若し神が彼を生み出し、また彼を通ほして世に何事かを爲させたまふといふことを許さなければ、吾人は全く說明に苦むのである。だから彼の偉

大は特殊なる神の啓示と見なければならぬ。リンカンの外に尙多くの偉人がある。即ち境遇その他の事によつて説明することのできない偉人は、矢張り彼等の中に、又彼等を通ほして働きたまふ神を認めないでは、どうしても説明ができない。キリストも亦これ以外の方法に由ては説明ができない。その時代は尙半開の時代であつたし、又彼の父母や先祖を見ても、偉大なる彼の生涯を説明するに足る原因を見出し得ない。彼の生涯は眞に偉大だ。その後二千年を經た間に、彼に匹敵し得るほどの人物は一人も出なかつたほど偉大である。此の如き時代に此の如き生涯を送つた偉大な人格があらはれたことは、神の働きに由るといふ以外に説明の途がないのである。

ピリポがイエスに向ひて『我等に父をあらはしたまへ。左らば足れり』といつたとき、イエスは答へて『我は永く汝等と偕にありしが、汝等なを我を知らざるか。我を見しものは父を見しなり』とのたまふた。吾人は今や是等の言葉

の意味を明らかに解し得るのである。即ち神の生活と性格とは裕かにキリストの衷にあらはれて居るから、凡そ彼の事業と使命を理解し得たものは彼の中に働き、又彼を通ほして働かるゝ父を見るべき筈だといふ意味である。凡そキリストを正しく理解した者は彼の衷に父の最高の顯現を見たことを思ふて滿足せねばならぬ。キリストの生涯と性格の中には、嘗て此の地球上に生活したどの人にも勝つて最もよく神に肖たものを見ることができる。たゞ性質のみを比較していへば、キリストは恰も神に等しいのである。兩者の差は量に於てゞある。即ちキリストは神の無限性を具へて居ないのである。諸君は彼が熟知して居つた愛すべき父の性格がキリストの言、とりわけ彼の性格の中にあらはれてゐるのを見るであらう。この意義に於てキリストは神を吾人に示したのである。即ち神の性格のどんなものであるかを吾人に示したのである。吾人はキリストを經由して彼と酷似て居る神を知るに至つたのである。

吾人は神を搜がし求めやうとして遂に地球上に於ける生命の起源に於て神を見出した。吾人は單純な生命から、人間に存して居る智慧に移り、人の智慧から更にその靈的德性に進み、靈的德性から無限の愛に、無限の愛から萬人の父に達したのである。これ以上高尙なものは無いのである。

神の存在について以上述べし如き表彰あるに拘はらず、或心靈は震へながら叫んで居る。『然りわれ信ぜん。汝わが不信を扶けよ。我は神を信ずれども、神を見出す能はず。願くば今一たび神を見出すの道をわれに敎へよ』と。

此くの如き人々は心の淸き者は神を見るといふイエスの言をいつも記憶せねばならぬ。若し人が利己主義一扁で、不純潔で、恩義を忘れて、人を咎め易い生活を營んで居るとすれば、其人は神を見ることができない。それが當然である。神は淸いものであるから、心の淸いものでなければ、これを識ることができない。汚れた人はたとひその罪ある生涯の終りまで叫びつゞけても駄目だ。

彼は決して神を充分に識り得られやう筈がない。最も力の强い望遠鏡でもそのレンズが塵にまみれて居ては太陽を見ることすら出來ない。丁度そのとほりに若し諸君の心靈が罪や惡しき慾に染んで居た日には、諸君は決して神の榮光を見ることはできない。それであるから神を識らうとする第一歩は極めて明瞭である。即ち我等の生活を淸くすることである。行は勿論、心の中を淸めることである。心の淸きものでなければ靈なる事物を見ることができない。靈的事物の眞價を認めることができない。

次ぎには、神の御旨に從ひこれを行ふて神を識るやうに勉めることである。これはたゞ心の淸いといふよりも一歩深入りして居る。即ち活潑な奉仕を要求する。從順の徑路は即ち神に到るところの大道である。神に從ふて神を識るやうに勉めなければならぬ。

昔の人は又焰の中に聞ゆる雷の如き聲を神の聲だと聞き誤つたが、諸君は諸

君自らの心靈の衷にひゞく靜かな小さな聲の中に神の啓示を求むべきである。諸君は屢々此の聲を聞いた筈であるが、そを認識することができなかつたのだ。時としては諸君が義務を果さんとするとき、內部より諸君を勵ます良心の衝動の中に、その聲を聞かれたであらう。時としては得も言はれぬ花の美の中に、時としては夕榮の中に、時としては大洋の涯りなき廣さの中に、時としては山嶽の崇嚴の中に、その聲を耳にされたことがあらう。凡て是等のものゝ中に在るとき、諸君は目で視ることもできないし、手で觸るゝこともできないが、左りとて又抵抗することのできない雄大なる或るものを感ぜずに居られなかつたことを意識せらるゝであらう。その或るものとは即ち神であつたのだ。諸君が搜がしてゐた神であつた。神は諸君の注意に接近し、諸君に彼自らを示さんとされたのであつたが、諸君はそれを氣づかなかつたのである。

君達は神を見出さうと願はるゝか。左れば自然を通ほして神と深き交通を爲しつゝある瞬間に神を求めよ。神がその肖像を畫かれたところの同胞人類の顏の上に彼を求めよ。君達の敬ふ父と聖化したる母の中に神を求めよ。父母は君達の爲に神の愛を示し得るやうに、神が君達に與へ給ふたものである。强大なる力もて此世界を引き揚げ人類を祝福した偉大なる心靈の中に神を索めよ。彼等は更に大なる神の啓示である。キリストの生涯と敎訓の中に彼を索めよ。彼は神の生命を一個の心靈の生涯に最も著しくあらはしたものである。君自らの心情の中に神を索めよ。君達の心より發する靜かなる小さき聲を聞かれよ。義に基く深き平和の中に神の在ますことを感知せよ。宗敎的の生活を營み且これを實施する中に神を索めよ。そは祈禱は人の靈を神につなぐ交通の聲であるからである。上なる天にも、下なる地にも、はた廣き世界にも、人類の歷史の中にも、神を索めよ。神は到るところに裕かに彼自身をあらはしたまふのである。心の淸き人にして神を索むれば必ず彼を見出し得べき筈である。

神を搜がし索むるには忍耐を要す。立ろに見出し得る人もあらう。よし一日の中、一年の中、はた幾年かに亘りて見出し得られずとも決して失望してはならぬ。若し年一年光明が徐々にあかるくなり、君達が少しづゝでも眞理に近づくことを得、神についての知識が追々深くなりゆかば、君達はそれにて滿足すべきである。人間が世の始より搜がし索めたものゝ中で、これほど大きいものはないのだ。たとひその爲に一生涯かゝつても遺憾はない。君達が神を詮索することが長からうとも短からうとも、これを見出し得たときの滿足は大きい。君達は宇宙最大の實在を見出したのである。人類が渴仰してゐた助力を發見したのである。宇宙間に於て人の心靈に最も深き滿足を與ふるところの事實を掴んだのである。

左に掲ぐるは合衆國議會の代議院附きの牧師エッチ・エス・カウデン博士が院内における禮拜の際に献げた祈禱である。此章を結ぶに適當して居ると思

ふから爰にこれを置いたのである。

『無限永久なる靈よ。我等に極めて近きが如く、又甚だ遠きが如き我等の神、我等の父よ。冀くは我等が汝の顏の光を視得るやう我等の靈の眼を開かせたまへ。我等が汝の聲の音樂を聽き得るやうに、我等の靈の耳を聞かせたまへ。我等が汝の愛の心臟の鼓動を感じ得るやうに、我等の靈の心臟を鼓動せしめたまへ。我等がいやまして近く、汝と偕に歩み得るやうに我等に生命を得させたまへ。益々豐かにこれを得させたまへ。そは汝のみ旨が我等の主イエス・キリストの中に成されし如く我等の中にも成されんが爲なり。アーメン』。

第三章　神の仁德と惡の存在

此の兩者はいかにして調和すべき乎

吾人は前兩章に於て、神は此の宇宙間に於ける唯一完全の人格なると同時に全智、無限、正義にして且愛心豐なる父なりといふ結論に達したのであつた。吾人は更に此の結論につけ加へたい。若し以上述べた通りでなかつたとすれば、その者は最高の神でない。即ちキリストが神であると敎へられた神ではない。又左樣な者は純粹の唯一神敎が說くところの神でもない。例へば彼の性格の要素の中に、扞格するところありとしたならば、即ち古來多くの人が敎へ、今も尙少數者の信ずる如く、彼の正義と仁惠との間に矛盾があるとしたならば、此の事は神の無限なる性格を破壞するであらう。爰に一の蒸汽船ありと假定せしめよ。そしてその船は一時間毎に一定の里數を航走すると假定せしめ

よ。ところが反對の方向から風が强く吹いて其船首に吹きつけるとすれば、船は風に逆つて走る爲に其速力を幾分か鈍くせらるゝが當然である。恰もその通り神の性格の中に反對の要素ありとすれば、その衝突の爲にどれほどかの勢力が殺がるゝだけ、それだけ神はその規定の無限性を減ぜねばならぬ譯だ。たとひ何ほど少しにても無限の分量が減ずることゝなれば、これはもはや無限とはいへない。限りあるものと言はねばならぬ。神の仁德はどこまでも完全であらねばならぬ。若しその仁德に制限ありとすれば、前と同樣の結果になるのである。夫れ故に吾人は神が無限にして調和せる德を具へたまふことを信じなければならない。左もなければ吾人の信仰の基礎はなくなつてしまふ。これは極めて重要な事である。そは有らゆる事が此の信仰の上に懸つてゐるからである。

吾人は下のやうな質問を提出せらるゝことがある。『若し神が善であれば惡

は何故に存するか』。『若し神が善であれば何故彼は罪の存在を許されるであらうか』といふ質問である。日本で宗敎を說く敎師等は誰れでも屢々此の質問に出くはしたことがあらう。若し神の性格が限りなく善であることを主張しやうと思はば、是非とも此の面倒な惡の存在といふ質問に答へんければならぬ。神の至善を主張することができなければ、吾人の信仰は駄目になるのだ。吾人は本編に於てでき得る限り上擧の難問に答へて見やうと思ふのである。

或人々は惡に別名を附することが即ち此の問に答ふる所以だと想像した。彼等は惡を惡といはずして滅ぶべき人間の心意に免れがたい誤謬だといつた。別言せば彼等は惡は實在でないといふのである。此の說の是非は暫く措いて問はないが、爰に儼然として存する二個の事實がある。その一は他の一と同樣實在である。その性質に至ては此の兩者全く正反對である。これらの事實の一を吾人は善と呼び、他の一を惡と呼ぶ。後者に對して吾人が下すところの名稱の如

何に拘はらず、その性質や人生におけるその實在は少しも變はらない。だから惡を惡といはず、他の名稱を附するにしても、その事は此の問題を解決する上に何の援助にもならない。

他の論者はかういふて居る。『惡は本來其構造に於て善だ。その結果が惡になるのである』と。彼等は此の答で充分だと思つて居るが、それは誤である。そこに思想の混雜がある。即ち彼等は發端における惡の本性と最後に神が惡を滅し惡を克服して之を善い目的に利用された事とを混同して居る。問題は惡の結果ではない。本來惡は何であつたかといふことである。自然の勢力がこれに加はり、これと戰つてその性質を一變した後の事を尋ぬるのではない。疑問はかうだ。人間が惡を仕出かしたときの動機及びその行爲の性質はどんなものであつたかといふことである。吾人が考察しやうと思ふのは惡である。克服された惡ではない。此の說は問題をその物から引きはなして、これに答へないので

ある。即ち避けやうとするのだ。

又惡は善を理解する上に必要なものであると答へる人がある。爰にもまた前と同じやうな思想の混雜がある。惡が存すればこそ神はその道義的の世界に於て之を教訓とし警告として利用し得るのだといふは、一應尤もであるが、此の事は毫も惡の存在そのものを說明し得ない。神は人間をして眞と善とを知らしむる上に、他に勝つた方法を有したまふことを思へば、吾人の言の眞なることは明かであらう。吾人は直覺や知覺や積極的又は肯定的の敎に由つて善を知ることができる。神は此方法に由つてある善を敎へられるから、一般の善についても同樣爲し得たまふ筈である。それなれば何を苦しんで故らに亂暴にして有害なる敎師(惡)を迎へたまはんや。他の何ものによりて釀さるゝよりも多くの悲慘を此世界に生ぜしめ、神が敎へらるゝよりも尙多くの善を破壞する如き敎師(惡)を迎へらるゝ理由いづこにありや。我等人間が經驗に徵して神が更に優り

し方法を有せらるゝことを知れる場合に、神が故らに迂遠なる方法を採りたまへりと信ずることを得んや。若し惡についての知識が左ほど必要なものとすれば、世間で一番美はしい家庭を有せらるゝ最も賢明な兩親等は、その子等を市の貧民窟に遣して善を學ばしむべき筈ならずや。少年を此くの如き境遇に入らしめば、彼等は知るを要せざる惡を知り、學ぶべき善を學ばざるべきことを吾人は承知して居る。これよりも遙かに善い考案はかうである。即ち少年少女をしてでき得るかぎり惡に遠ざかりて之を知らしめざることである。夫れと同時に實例と訓誡とによりて肯定的且積極的に善を彼等に敎ふることである。若し此くの如き撞木杖(惡に譬ふ)を賴りに步行する外に旅行の良法なしとすれば、此の道義的世界は實に情けなき世界になるであらう。此の說は惡が世にあらはれた後、神がそをいかに用ゐらるゝかを說明して居るが、惡の存在に就ては何等の說明をも提出し得ないのである。

以上簡短に列擧した諸說については幾卷の書籍が世に公にされたか知れない。餘白少きため吾人が試みた反駁も亦頗る不充分であつたであらうが、上擧の諸說の缺點を示すには充分であつたらうと思ふ次第である。

惡といふ詞は罪といふ詞よりも廣い意義を包含して居るやうである。罪でなくとも惡と認むべきことが澤山ある。吾人は先づ狹い方の罪に就いて考へて見たい。善良なる神が罪の存在を容るし置かるゝといふは、抑もいかなる譯であらうか。吾人は此の問に答ふる前に罪の何たるやを了解しておくべき必要がある。罪とは世間から認められ、また自分も知つて居る善良なる法律(又は法則)を故意に破ることだ。有らゆる罪は善い事物の濫用だ。委しく言へば適當に用ゐたならば善事となるべき事を濫用するのである。殺人罪を例に取つて見やう。これは恐くは以上述べた眞理を見るには一番困難な事件だらうと思ふ。人の肉體は朽つべきもので、いつかは死を免れぬといふことは當然である。吾

人が今有つて居るやうな肉體はいつまでも生きて居るには反て不都合である。此肉體は更に高尙な生命の營養物として消耗される爲に存して居るのである。だから此體が使用に堪へなくなれば捨てゝしまつても少しも惜くない。心靈は一層優つた體を有つことができやう。死は人間にとりて世間一般に信ぜられてゐるほど怖ろしいものではない。有益に送られ美はしく終りを告げた生涯に對しては、死は一の答である。譬へば勞働者が朝出かけて一日の業を了へ、夕方歸宅するやうなものだ。人間は此世に於て大いなる道義的事業を成さんが爲に遣されたのである。その出發するや彼は元氣に充ち、天來の靈覺(インスピレーション)に動かされて居たのである。左れば既にその勢力を使ひ盡し、その仕事を成遂げ、神の慈愛の美と平和の中に夕方が來たのであるから、何の不思議もなからう。別言せば永い有益な生涯の終りに來るべき筈の死が自然に來たのであるから、それは一の祝福である。即ち心靈が將に新しい生活に入らうとするのである。殺人は、

自然の運命が來たときに幸福に死すべき力を、他人が妨げて之を濫用すること
だ。殺人者は天が人に與へた此の賜を奪つてこれをわが惡しき目的のために濫
用するのである。吾人が若し人間の犯し得るすべての罪を吟味したなれば、こ
れと同樣の證明を見出すことができやう。罪といふ罪は殘らず此の點に歸著す
るであらう。即ち罪とは適當に用ゐたら必ず善となるべき事を、何時か、いか
なる仕方かに由つて濫用したのである。吾人はこゝに吾人の議論を終結して左
の如く言ふことができやう。神は罪に對して責任を負ふべきでない。善き事物
を濫用した人間、或は自ら承知の上で善良なる律法を破つた人間こそ、罪に對
して責任を負ふべきである。それなれば本書の劈頭に述べたやうな問題は自然
に消滅する筈であらう。

吾人が更に進んで此の問題を研究せんとするに當り、吾人は須臾(しばらく)たりとも神
が各人のために豫め定められた大目的を忘れてはならぬ。その目的とは全い人

格の發展である。これが神の大目的であるといふ事は、神が人間に對して爲さ
れた有らゆる交渉の中に現はれて居る。歷史に記されたすべての大なる進步は
人格の上に爲された神の事業の記錄に過ぎなかつた。改良といふ改良は何等か
の仕方に由つて人格に及ぼした結果に終つて居る。歷史の始まるずつと以前、
即ち人間がまだ地球上に於て最劣等の狀態にあつた頃から、幾千萬年の永い永
い進步を通ほして現今見るが如き高等の狀態に進むまで、あり〳〵と此の事象
を指すことができる。すべての宗敎の有らゆる大敎師・大啓示者等の事業は皆
なこれであつた。敎育といひ、社會改良(境遇の改善)といひ、政治の改革とい
ひ詰りは皆此の點に歸著して居る。人間が此の世に生れて以來此の事はすべて
の點に於て神の業であつた。『汝等天の父の完きが如く完くなるべし』とのたま
ふたキリストの大勸告の要旨もまたこゝであつた。それだから吾人が人生問題
を研究するに當つて、常に心にとめねばならぬ一事、即ち各人に對する神の大目

的は吾人をして剛健、賢明、且正義なる人格を養はしむるに在りといふことである。各人の中にかゝる人格を發揮せしむることである。

完い人格は罪を超越することができる。即ち適當に用ふれば善くなるべきことを故らに濫用する憂を脱し得るのである。完い人格を産出するには二つの方法あるのみだ。その一は最初から完い人格たらしめるのである。しかしかういふことが出來やうとは考へられない。何故なれば完い人格の中には奮闘の結果に依らなければ得られぬ筈のものが澤山含まつてゐるからである。世間には、無限の神にはこの事ができる筈であり又爲されさうに思はるゝと論ずる人があるから、議論の爲めに暫く之を容るして論歩を進めて見やうと思ふ。他の方法即ち完い人格を養成する第二の方法はかうだ。最初は不完全であるが、漸次之を完全ならしむる力を與へることである。

假りに神が人間を最初から完全なものと爲し、罪を犯す力なき者にされたと

想像して見やう。此の如き者は少しも努力の光榮を感じ得ないであらう。彼はすでに完全だから、更に奮發興起すべき必要がない。恰も時計のやうだ。即ち全き精確を以て進行する時計の機械に異らない。隨つて彼は完全といふものゝ、價値を自覺することができなからう。また譬へば自分には一文をも稼ぎ出さないで、大きな財産を親から讓り受けた富家の子息のやうである。その人は自ら苦勞して財産を作つた父の如く金錢の價値を知ることができない。此くの如き輩は神の御手際やその熟練を稱讃することはできやうが、彼は更に何等の光榮を享くることができない。實は享くべき價値がないのである。但し以上の假定は自家撞著である。その理由は明瞭だ。努力に由て發揮せらるべき筈の完全に必要なる性質が缺けて居るからである。それもその筈。その必要な性質を生ずべき努力がなかつたからである。若し此の如き完い人間が造られたとすれば、此宇宙は自動機械の陳列場のやうなものになるであらう。これは必ず失敗であ

る。又有り得べきことでなからう。

若し人間が完全に造られなかつたとすれば、その他には唯一の方法しかあるまい。神の選ばれたのはその方法である。即ち始めは不完全なものにして漸次努力して完全になり得る力を與へられたといふのである。しかし此の事を許すとすると、人間は自らの完全を任意に彫刻し得るところの危險な機械を任かされたと同樣である。その機械は即ち選擇の自由で、これなしには完全を企圖し得られないのである。此の選擇の力は之を善用することも惡用することもできる力である。選擇が宜しきに適はぬこともあらうし、善いものを惡くするものもあらう。之を惡用すれば、前述べた通り罪となるのだ。しかし人格の完全を養ふ爲には是非此の選擇の力がなければならぬのである。

吾人の思想を一層明瞭ならしむる爲めに、吾人が左の如き想像を設くることも強ち不適當であるまいと思ふ。それは最初神がこんな風にお考へになつたと

想像するのである。『人間に圓滿な幸福を享けしめん爲め、完全な人格を生ぜしむることが我が目的だ。予は此の人格を體現すべき人間を最初から完全に造ることもできたが、さうするとすべての光榮をわれ獨り占有して、わが子たる人間は毫もそれに與かることができなくなる。のみならず幸福の中に發展と努力の意識に由らなければ、得ることのできない高尙な性質がある。それを人間から奪つてしまふ譯になる。こんなことは決して考へらるべき筈でない。之れに反して予は彼を最初不完全な狀態におき、自由に完全に向つて努力せしめることができる。完全に達する爲めに、予は賴つて以てこれを成就すべき必要の手段を彼に與へなければならない。何は扨ておき予は彼に或程度の自由と自分で選擇する力倆を與へなければならぬ。人間が不完全であり又智慧の足りないことを予は承知して居る。即ち完全に達せんとして時には選擇その宜しきを失ひ、時には彼の爲めになるやうに與へた此力を濫用することあるを予は知つて

居る。併したとひ危險であるにせよ、此の力なしには人間は完全に達し得ないのであるから、予は此の力を授けなければならぬ。予は之を與へ且之を用ふる方法をも彼に敎へたいと思ふ。予は一歩を進め、彼が誤つて此の力を濫用したとき、その罪を利用して彼の爲になるやうに計りたい。予の與ふる祝福を正當に用ふるやうになるまで、予は彼を懲らしめ彼を導き彼に勸告するであらう。彼の力と發展を援くるに足るだけの助力を予は欣んで彼に與へるであらう。彼はその助力を受けて完全に達するであらう。これは永い〳〵經過であらう。そんなことは少しも懸念するに及ばない。何故なればその目的が永遠であるからである。彼は限りなく發展を續けることができ、又自覺あり努力あり向上あり絶えず自我を建設する所の完い人格たらんとする光榮ある幸福に充たさるゝことができるのである。遂にその完全に達し得た曉には善い事物の濫用もなく、罪もなく苦惱もないのである。わが全家族はとこしへに幸福であり且祝福せら

るゝであらう。我はかく爲さうと欲ふ』。

以上は全く想像である。吾人の思想を讀者に解し易からしめん爲めに想像してみたのだ。吾人は神が此の通りに考へられたらうとは思はない。諸君も誤解なさらないやうに願ふのである。吾人はかう言ふこともできる。神は人間の罪に對して責任を負はれない、又これを負ふことを願はれない、將た又その事に同意することを願はれないのである。神は徹頭徹尾これに反對さるゝのである。人間が賴つて以て完全に達し得る唯一の力〻與へられた事に就いては、神は責任を負はるゝのである。但し此の力を與へられた目的はたゞ一つあるのみである。即ち人をして完全に達せしめんが爲めである。神の責任はこゝに終はるのだ。但し神が人格の發展を害せず、人間に存する責任の觀念を損はずに、天よりの賜を能く用ゐることを人に敎へらるゝ場合は除外例である。此の賜なかりせば人は完全を成就することはできない。神が此の事に就いて爲されたこ

とはすべて善い。その善いものを善く用ふるか或は惡しく用ふるかは、人の責任である。以上述べた一片の想像は、罪とは完全に達する途中における不完全の偶發的の一事件たるに過ぎないといふことに歸着する。吾人をして更に具體的の一例を擧げしめよ。即ち此度の歐羅巴の大戰亂である。此戰爭の恐ろしい有樣を觀て信仰を失つた人が寡くない。彼等はかう尋ねるのである。「若し此宇宙に神があるならば、その神はなぜ其發端に於て此戰爭を止めさせなかつたであらうか』。先づ第一記憶すべきことは、此戰爭の責を負ふべきものは神でなく、人間であるといふことである。又神が人間に發見發明の才能を與へられたのは、同胞を殺戮する手段を發明し發見する爲めではなかつた。寧ろ人間を惠福する手段方法を發明發見する爲めであつた。此戰爭を釀し且勃發させるに至つたのは、人間がこれらの善いものを徹頭徹尾濫用したからだ。假りに神が氣儘な方法又は不自然な手段に由つて此戰爭を防遏することができたとしても、

それは全く機械的の仕事であつて、人間の性格や性質を變更する譯には行くまい。人間の性質が現在有るがまゝに續くとすると、いつも同じやうに恣にこれを防遏し又は抑止しなければ、戰爭は何時までも勃發して熄む時はなからう。寧ろ徐ろに人間をして一方には戰爭の恐るべきことを知らしめ、他方には四海同胞の精神を鼓吹して戰爭を仕向くることは恥辱であつて、名譽でないことを知らしめ、一致協力して戰爭を止むるに至らしめる方が遙かに優つて居る。此時に至つてこそ世界は始めて平和に安堵することができやう。神の仁德と人間の側に於ける神の祝福の無道破廉恥な濫用との間に、何等の扞格がないことを了解するには、是非包括的な見解を要するのである。人間が完全な途を進み行くに從つて其濫用は益々寡くなるであらう。終には全くその濫用の痕を絕つに至るであらう。その時には世の中に罪がなくなるであらう。かくいへば誠に容易な事のやうであるが、實は罪は最も恐ろしいものである。不完全の狀態に對

しては偶發的事件であらうが、その實罪は神に對する不從順であり、人に對しては人權を無視することである。そを犯す者の心靈を墮落せしめ且恐るべき結果を生ずるものである。罪は結極克服せらるゝものとしても、一旦罪を犯した心靈は、最初から全く神に服從してその有らゆる祝福を正當に享けたらん時の狀態と一樣であり得ることはできないのである。

此の事は罪は本來その構造に於て善いものであるといふことを意味しない。罪は善いものゝ濫用である。その性質の中には惡の外に何もないといふのである。然るに神は罪を滅ぼしこれを克服するまで、その惡しき性質に就いて盡力さるゝのである。神は罪のとこしへに存することを許さない。神は遂に惡を滅ぼして善のみを留めたまふのである。

かくの如く吾人が人性における神の働きを奥深く觀察し、人間に存する神の大目的とその目的を達するに必要な方法などを併せ考ふるときは、罪の存在と

永遠の善との間に起るだらうと假定された衝突は全然消散する譯である。啻に衝突のないばかりでなく、夫の力の賜即ちその力を濫用する爲めに罪が發生せんとするその力の賜は、神の仁德の最大の表彰であることを知らねばならぬ。

以上は罪について論じたのであつたが、今や罪ではなく、廣く惡について考究して見やうとすると、困難は一層加はるやうに思ふ。世間には莫大な苦痛があるし、苦痛を蒙むるものゝ側から見て罪の結果といへない苦痛が澤山ある。その中には無意識に律法(又は法則)を破つた爲めに生じた苦痛もあらう。また苦痛を嘗むる者以外の他のものが法則を破つた爲めに生じたこともあらう。遺傳の事の如きは則ち後者の適例である。自然界に存する法の中で、遺傳の法則ほど、甚しく非難され、また愁歎されるものは他にない。歎ずる者問ふていはく「子の生るゝ前にその親達が犯した罪の爲めに頑是ない幼兒が苦痛を受けねばならぬといふは果して正當だらうか」。此の法の存せん限り是等の恐るべき結

果は法と共に存せねばならぬ。左れば吾人はこゝに想像を設けて見やう。此の如き多くの苦痛の原因と假定されたる遺傳法が全廢されたと想像せしめよ。遺傳が全廢さるゝと同時に、これと關連したことは善惡共に消滅するであらう。疾病や苦痛も遺傳されないし、身體及び品性に關する性質も亦遺傳されないことになる。遺傳法が廢された以上は、子孫が親の健康やその他良い特徴を遺傳するだらうといふ保證が無くなる。善良なる父母に善良なる子孫ができやうか、否必ず人間ができやうといふ保證すら無くなつてしまふ。彼等の子孫は白痴だらうか。野蠻人だらうか。猿猴又は蛇であるまいか。更に分らなくなる。これまで吾人の同類が繼續されるだらう、又人間には人間の子が生まるべき筈だと期待された保證の土臺であつた遺傳法は、今や全く中止の姿になる。その代りに混亂と恐怖が起らう。此の如き混亂と恐るべき災厄とは、全世界をして遂に下の如く絶叫せざるを得ざるに至らしめるであらう。『我等をして再び有り難

き遺傳法を有せしめよ。此の法あればこそ人類の家庭が持續され、家庭の美と樂みが成立されるのである。願くば我等をして此の祝福を挽回せしめよ。我等はもはやこれを濫用せざるべく、又これについて愁歎することもなからう』と。

陸を通りて流るゝ河あり。その水や清し。田園を濕ほし、人畜に飲料を給し、その兩側の堤上には車馬往來して工業や通商に便利多し。萬人皆その恩惠をうく。然るに爰に人あり。その流に毒を投じたりとせばいかに。魚族忽ち死し、腐爛して臭氣鼻を襲はむ。これを飲むところの人畜その毒に中りて或は死し或は病み苦まむ。商業も爲に衰へむ。此の際吾人は河を責むべきか。吾人はその河流の方向を變へ、或は全然之を破壞し去るべきか。寧ろ水中に毒を投ずる惡漢を防ぐが良法にあらざるか。河に罪なし。その水は清く、人畜に健康を予ふるものゞかし。遺傳法は即ち此の河に比すべきである。人類を祝福せん爲めに人類の中に行はるゝ法則である。罪ある男女がその中に罪の毒を投げ込んだ爲

め、子孫に病氣を傳へ苦痛を予へるのである。左れば河を譴責するの非なるが如く、遺傳法を譴責することも同樣に無理である。遺傳法は全く人間の爲に設けられたものだ。人間の幸福の爲めといふ外に何の目的もないのだ。彼等の罪に由つて人間の血の流れに毒を投じた人々を非難するは道理に適つた方法である。吾人は及ぶ限り此の流を清めてこれを純潔にせねばならぬ。

河水はたとひ毒を投げ込まれても、永久にその毒を留むるものでない。どれほどかの距離を流れてからは、その水は元の純潔に復へる。それと同じやうに罪の汚が人の血液や體の組織に入つたにしても、永久にその痕跡を留めるものでなく、代を經るに隨つてその力は追々弱くなり、終には全く無くなつてしまふ。これは此の遺傳法の中に存する智慧であり又有り難い一特色であらう。かく觀來るときは大に愁歎された遺傳法、またその法の働きが神の永久の仁德と相容れざるものゝ如く考へられた此の法則は、實は神が人間に與られた愛のい

と高き表彰の一だといふことが分かるであらう。若し吾人が審かに究め充分に知り得たらんには、神の愛と遺傳法とが調和し得らるゝ如く、人生に關する、否宇宙に關する有らゆる法則は、いづれも神の表現として說き明かすことができやう。それらの法則はすべて善いものである。善くない法則は一もない。萬一惡を生み出すやうな場合ありとせば、そは法則を破るか或はこれを濫用した結果である。

合衆國ボストン府の有名な牧師デヨルヂ・エ・ゴルドン博士はかう云つた。

『人間の良心に一の規定がある。正邪、義不義、高尙と野卑、公明正大と陋劣、道義的法則と道義的混亂などの區別は一目瞭然である。いかなる雄辯家が堅白異同の辯を弄んでも、その區別を取去つてこれを同一視せしむることはできない。そこに動かすべからざる規定が儼然として存する。吾人は恣にこれを作ることもできなければ、勝手にこれを廢することもできない。晝夜の交代や潮の

滿干や四季の循環が正確にして避くべからざると同樣、また自然の法則が破るべからざるが如く、道義上の規定も亦人間世界に於て確固不動のものである』。若しすべての人類が物質的たると道義的たると將た靈的たるとを問はず、神の設けられた有らゆる律法や法則に從つたなれば、罪はその痕を斷ち、疾病は消滅し、疫病は起らず、戰爭は皆無となるであらう。一言につゞめていへば、天國が此の地球上に出現するであらう。若し此事にして眞ならば、神の律法の善良なることは言はずして明瞭であらう。若し人生に關する凡ての法則が、終局まで之を分析しても猶善いものであるとすれば、吾人は正しく道義的の世界に生活して居るのである。此の世界はその中心に至るまで道義的である。此の世界は出來得るかぎり最善であるだけでなく、想像し得らるゝかぎり最善である。此の世界を支配して居る政治の原則は全智者の深謀遠慮から出たものであるから、苟もこれを變更せんとするは宜しくない。前に述べた遺傳法の例の如

く、假りに之を變更せんとすれば、それは改善でなく反て改惡となるであらう。吾人は深く觀察すればするほど、慈愛と善意が此の世界を支配して居ることを、益々明かに認めるであらう。

吾人がまだ記述しなかつた惡の種類がある。例へば地震、海嘯、及びその他の天變地異の如き自然界における異常の現象に伴なつて發生するところの災厄は即ちそれである。吾人はまた爰にも唯一つだけの例を引いて論じて見やう。即ち地震を惡の此の種類の代表としやう。日本は地震の多い國柄であるから、即ち讀者諸君の感じも自ら深からうと思ふのである。昔し此の國には地震が屢々起り地球の安定さへも疑はれたほどの時代があつた。抑も此の地球の表面は鎔金の塊の上に浮んで居る薄い膜のやうなもので、內部は燃ゆる火の作用に由つて絕えず動搖して居つたのである。然るに永い時代を經る中に火力漸く衰へて地球の表面(地殼といふ)がダン〳〵厚くなつた。地殼が充分堅くまた充分安

全になつてから、生物があらはれ、更に永い時代を經過して高等動物の棲處に適するほど堅固になつた後に、人類があらはれたのである。人類が生存し始めた時代と云つても、之を今日に比ぶれば、地球上の動搖は遙かに頻繁で又大きかつたのである。近頃に至つても猶折々見聞するところの動搖は昔し猛烈であつたものゝ微弱なる遺物に過ぎない。今では例外と見るべき天災地變が昔しは常例であつたのである。これらの災厄は、莫大な勢力に充ちて絶えず進化し來つた地球に取りては、ホンノ偶發的出來事に過ぎないのだ。未來百萬年の後には地球上の動搖が全く止んでしまふ時が來るであらう。しかし其時此の地球は寒冷死せるが如くなり、最早人間の棲處に適さなくなるかも知れない。恰も燒け盡して冷たく些の生氣なき月界の如くなるであらう。人間は死せる世界に生活することはできない。若し人間が勢力熾にして刻々進化する世界に生活せんと欲するなれば、その勢力と進化に伴ひ來る事件を避くることは不可能である。地震は即ち此の如き理由の下に發生する偶發的事件である。吾人は去年二月爆發した櫻島の地震の爲に信仰を失つた人あることを聞いた。一地震の爲に破壞さるゝやうな信仰は大した價値あるものとは思はれない。何故なればその信仰が事物の皮相なる觀察の上に据ゑられて居るからである。吾人が一層深く觀察を進むるときは、此の地球の進化狀態は善良なものであつて、地震の如きは單にその經過の途中における一小事件に過ぎないことを知るであらう。

自然界に起るこれらの災難は、これをその全體に引き比べて見れば、ホンノ小さい出來事である。吾人が宇宙全體を想像しやうと試みる時に、吾人は上擧の事件が比較的に甚だ小さいことを覺るのである。假りに吾人が此の地球から一百萬哩も隔つた處に位置を占めることができたと想像せしめよ。更に吾人の視力が强くして宇宙間の他の遊星と此の地球との關係を明かに見ることができると想像せしめよ。吾人の棲める此の世界は宇宙全體に比べて實に小さいもの

であることが分るだらう。一百萬哩の遠方から此の地球の形狀を見ることができたとしても、その表面に棲んで居る人間を見る爲には更にその視力を數千倍增加せねばなるまい。たとひ見得るにしても、人間は恰も極小さい黑點のやうに見ゆるのみで、その動作などは素より目に入るまいと思ふ。形體の上より言へば人間は實に小さい。宇宙の全體、否な地球の全體に比べても實に小さいものである。若し諸君が此の如き位置から此の地球を見たとするなれば、地球は熱した物質の球であつて、その表面が、譬へば蜜柑のやうに冷めたい外皮で包まるゝことを發見するであらう。蜜柑の外皮はその內容に比例して見ると、地殼よりもずつと厚い。言ひ換ふれば、冷めたい地殼は地球の內部にある熱い物質に比例して見ると、反て薄いのである。折々此の地球の外皮が破裂したり、少しばかり震動したり、又その爲めに都市が埋められたり、大破損を生じたりすることがある。勿論都市が地震の爲でなく他の原因に由て徐々に滅びてしまつた例もあるが、世人は毫もそれを八釜ましく攻擊しない。昔しのバビロンやアレキサンデリアやシーベス（古代埃及の帝都）や鎌倉や奈良なども亡びてしまつたが、吾人はその爲めに少しも神の善意慈愛を疑はないのである。そも〳〵吾人が神に不平を訴へたりするのは、顯著なる前例を忘れ、また全體との關係から引離して單に事件そのものゝみを見るからである。吾人は曩きに人間を小さな黑點だといつたが、地球の表面を威張つて濶步して居る小さい黑點即ち人間に關係する事柄が彼自身に取りて極めて大切なやうに思はれる。殆んど可笑しいほど大切なやうだ。人間は彼が廣大な宇宙の一小部分であることを忘れて居る。彼は自らを動いて止まない宇宙と比べて見ることを忘れて居る。彼は進行しつゝある數限りない同類の隊伍の中に己れを加ふべきことを忘れて居る。地震其他の災厄の爲めに自己の信仰を失ふた人は、堅固な信仰の基礎を有つて居ない人であると吾人は前に述べて置いたが、更らに玆に言ひ加へたいことがあ

る。即ちその人が物質上から自己をあまりに重く見過ぎた爲めに、その信仰が覆へされたのだと言ひたい。若し彼をして全體の中に自己の適當にして謙遜なる地位を占めしめんか。若し彼をして全體の最高の善の爲に法則に從ひ規定を守らしめんか。若し彼をして古今幾千年の歴史を通覽せしめ、その視線の達し得る境界に自己の全き運命を見出さしめんか。則ち幾多の疑問反對は霧の如く消え行くであらう。かくすれば萬人の父なる神の窮りなき慈愛に對する信仰の土臺は安全になるであらう。吾人がその信仰を失ふは要するに吾人の眼界が狹い爲めである。

大洋の表面の波は常に動搖して息まないが、深く海底に沈みゆけば水はいつも不斷の靜かさを保つて居る。それと同じやうに、人生の皮相的觀察はいつも變動して居るが、深く物の眞相に立ち入り、實體の根蔕を貫いて居る理法を看取した曉には、人は限りなき善(又は仁愛)のとこしへの靜かさの中に安心立命

することができやう。

最後に述べたいことがある。吾人がこれまで論じ來つたところは左の事實を基礎として居る。即ち惡は一時的のもので決して永久的でないといふこと、又正義と眞實とは最終の勝利を占むべきこと、又完全な人格即ち神聖と幸福の中に最後の救濟を全ふすることは、世界萬人の達すべき目標であること――要するにこれらの事實に基いて立論したのである。一人でも此の目標に達し得ないものはなからう。然らざれば神が此の世界に成就し給はんとする大業は恰も九仞の功を一簣に缺ぐのである。やうやく出來上つた立派な大建築を糞土の如く海の底に投げ棄つるに等しい。

若し終極の結果が吾人の言ふ通りでなければ、吾人は何も言ふべきことはない。別言せば若し惡が何かの形相で、又何程かの度合で、永久に存續するものとせば、吾人は最早此の問題を擲つて敗北を承認せねばならぬ。若し無限の地

獄における惡しきものゝ永遠の悲慘が眞であるとすると、惡の問題を解決する道は絶對に存しないのである。神は失敗されたのだ。左なくば成功を願はれなかつたのである。いづれにせよ惡は此の宇宙の上に、暗澹として動かざる棺覆(くわんおほひ)の如く、とこしへに懸つて居るのである。キリストが說きたまふた神が人間の父であるといふ事は破壞されるであらう。神の限りなき仁德に對する信仰もこれと一緒に滅びてしまふのである。吾人は神の仁德が有らゆる心靈の中に最終の勝利を占むることを信ずるが故に、惡の問題も亦(いかなる形相を以て顯はるゝにせよ)無限の善と愛の調和の中にその解決を見出し得ることを信ずるのである。

然り。實に然り。罪は消え苦みは絶え果てん秋來らんとするなり。最も脆弱にして又最も不仕合せなる心靈も力を得て起ち、自らの存在の爲に神を祝福する秋來らんとするなり。神の祐助によりて自ら奮發努力して完全に達し得たる

者のいと大なる悅樂は此の宇宙における凡ての心靈を感動するなるべし。此はこれ英國の詩聖テニソン卿が

遼遠なる將來に起らんとする神の一大事件
全宇宙の受造物はこれに向つて進み往かんとす
"That far off-divine event
To which the whole creation moves"

と歌ひしところの大事件にあらずして何ぞや。

吾はわが身邊に邪惡の潛めるを看る
吾はわが衷にある罪咎を感ず
吾は此の世が呻吟き且苦しげに叫びて
その罪を懺悔せるを聽けり。

ホイッチア

狂亂昏迷の狀態にありても
暴風雨と洪水とに搖り動かされつゝも
なほわが靈は一つの恒星に賴りすがる
神の善なることを吾は知れり。

"I see the wrong that round me lies,
I feel the guilt within;
I hear, with groans and travail-cries,
The world confess its sin!
"Yet in the maddening maze of things,
And tossed by storm and flood,
To one fixed star my spirit clings:
I know that God is good!"

Whittier.

第四章　靈魂不滅の證據

吾人は緒論の中に、活きた宗教は輝いた普遍的運命、別言せばあらゆる人間の心靈が終に救はれるといふ希望を有つてゐなければならぬことを承知した。いかなる宗教でも此要素を缺けば、薄弱であり、朽つべき運命を有つて居るのである。絶望の宗教は失敗しなければならぬ。希望には人を救ふ力がある。而してその希望の光輝が大きければ大きいほど、その効力も亦大きい。故に本章及び次章に論述せんとする題目は極めて大切である。

靈魂不滅に對する信仰の實際的價値は往々低く見積られ過ぎる虞がある。世間には『自分には一度に一の生命あれば澤山だ』と言ふことを得意がつて居るやうに思はれる人々がある。成程一時に一つ以上の生活を營み得る人は一人もなからう。しかし誰でもその一つきりの生活の價値を增すところの觀念を有つ

こともできるし、又之れに反してその價値を減少するやうな思想を有つことも
できる。靈魂不滅に對する信仰は吾人が今生活して居る生命の價値と意義とを
著しく增加するものである。若し一種の貨幣があつて、それが明日から通用し
ないとなると、金として當然に有する筈であつたその規定通りの價値は今日か
ら減ずるであらう。若しその貨幣が今後幾日經つても、相變はらず通用する
ことゝなれば、その價値は今日も依然として減ぜず、前の假定の場合とさかさ
まに反て增加するであらう。それと同じ道理で、吾人の生命が明日終りを告げ
てそれが全く滅びてしまふものとすれば、その生命は今日からその價値を減ぜ
んとする筈であらう。しかし若し生命が永久に續くものとすれば、肉體の死後
にも尙生き殘る部分(靈性)はその現在の價値に於ても大に增加するであらう。
靈魂不滅は品性や眞實や愛やその他心靈に屬する有らゆる性質の價値を增加す
る。そはこれらのものは現在に於ける永久的事物であるからである。假りに人

間の生活が明日全く滅びてしまふものとしても、現在あるまゝの生活は生活す
る甲斐がないかといふに、吾人は決してさうは思はない。若し吾人の生活が眞
に人間にふさはしい生活であれば、あるがまゝの生活だけでも尙その價値があ
ると思ふ。しかし若し吾人が未來を覆ふところの幔幕を取りのけて、その永久
無限なことを明かに示したときには、その價値は更に百倍も增加するであら
う。學ぶといふことは永久の眞理を永久の心意の中に入れることで、此の二つ
のものを永久に一致せしめるのがその目的である。此の一致に達した場合には
眞理も、心意も、此二者の結合即ち學ぶといふことも、その價値に於て、又大
切さに於て、限りなく增長して窮まるところを知らないのである。

若し生活が明日終りを告げるものとすれば、吾人は多く爲すことができな
い。吾人は何ものをも仕遂げることができない。此假定の下には、吾人は一つ
として纏まつた仕事を產出し得ない。言ひ換ふれば、內部の心靈的發展が關係

するかぎりは、凡ての事が斷片的に不完全のまゝに打棄つて置かれねばならぬといふ事實は、いかにも吾人の勇氣を沮喪せしめ、吾人の精神を萎靡せしめるものである。之に反して若し吾人が永久の中に生存し、永久の爲に働いて居ることゝなると、どんな大事業でも成就せられ、捷利は最後に贏ち得らるゝことを、吾人は信ずるのである。これは今日に對する雄大なるインスピレーション(靈導)である。『改革に志す心靈の爲には永久に働くとも爲し盡されぬほどの仕事がある』。かゝる心靈はその仕事を成遂げ得るといふある擔保を得たく欲ふ。限りなき日こそ即ちその擔保である。今こゝに一の永久の仕事に取りかゝらうとすることは奬勵の一つである。

モンガー博士いへらく。『憂が希望のない死に由つて挫折せらるゝことは、文化の一要素として愛の美はしさを磨滅し、且其力を弱めるといふこと極めて確實である』。愛は靈性の不朽に由つてその光輝を放つものである。愛は發育

する爲めに希望に添はなければならない。左なくば愛は冷却して石に化してしまふのである。

靈性の不滅がないとすると、人間の神性が滅びてしまふ。それと一緒に自重自尊の念も消え失せるのである。自重自尊の念の亡くなると同時に人性の强味と力も見えなくなり、隨つて性格の基礎が立たなくなるのである。

一度に一つの生命で澤山だと信じますか。成程さうです。しかし凡ての人が神の不朽の兒等であるといふ思想ほど、その一生涯の間に實用的で、且日々の行爲の助となる思想はないのである。靈魂不滅は生命ある宗教、同時に又生命を與ふる宗教の最も肝腎な要素の一である。

靈魂不滅に反對する眞の證據の少いことは驚く外はない。反對論の八釜ましいことから判斷して靈魂不滅に反對の證據は澤山ある。隨て其不滅を信ずることは一の迷信に過ぎなからうと世人は早合點するやうである。だが事實はそれ

とあべこべで、反對の爲めに提出される議論は重味のあるものでない。例せば吾人の有らゆる知識は神經組織と關聯して居る。であるから吾人は頭腦を離れて心意といふものを考へることができないと言ふのである。名高いハーバード大學の教授で科學と哲學に造詣の深かつたジョン・フイスクがかう言ふて居る。

『吾人の思考力は吾人の經驗に由つて制限される。經驗は決して無限なものでない。世の中には確かに莫大な經驗の地帶(又は境域)がある。それは吾人の知るところの經驗の地帶と等しく眞實でありながら、吾人はそれに就いて極めて微小なる概念の端緒をさへ形造くることができない。吾人は光輝ある精氣(ether=エーテル)がどういふ風に結合して居るやら更にその關係を考へることの不可能な性質を併有して居ることを信じなければならない。精氣(エーテル)は金剛石のやうな蒼天であるといふと、眞に馬鹿げたことのやうに思はれる。だが吾人は事實さうであると確められるのである』。二個の物體が同時に同一の空間を占

領することができるといへば、愚人の放言のやうに思はれる。吾人はこれを考へることができない。だが精氣(エーテル)と他の物體との關係は正さにその通りである。フイスク教授はいひ添へて居る。『吾人が頭腦を離れて心意のことを考へないといふ事實はそれに反對した最小の推定をも生ぜしむるものでない。即ち頭腦を離れて心意は存在し得ないといふ推定を許さない』。

大に信賴されて居る議論は勢力の相互關係の學說から出て居る。勢力の各の形式は勢力の如何なる他の形式にも變化され得るものであり、隨つて人間の心意は單に勢力の巡廻中にあるもので、其巡廻は終結すべき時のあるものであると主張さるゝのである。吾人はこの說を今少しく緻密に檢査して見やうと思ふ。七百七十二封度(ポント)の重量のものが、一呎(フイート)落下すると目方一ポンドの水の溫度を一度上げるだけの熱を生ずる。物理學ではこれを一呎封度(a foot pound)と稱して物質的精力を測量する單位になつて居る。小は一神經の震動から大は一遊

星の運行に至るまで、物質的精力の有らゆる形式はこの呎封度で測量せられる。しかし何人が、偉大なる眞理とか、不滅の愛とか、高潔なる衝動とかいふものゝ力を呎封度で測量し得るであらうか。どう考へてもこれらのものは全く前に述べた勢力の巡廻の範圍外に存立して居るやうに思ふ。

博士マリオン・デキ・シャッターは靈魂不滅と科學といふ題で說敎したが、そのはじめにかういふて居る。『ワシントンの博物館に「重量十五封度の人の身體」と附札のしてある一の箱がある。其箱の中にはその身體を構成して居つた灰や瓦斯やその他すべての物質の集合がある。早くいへば完全な人體が其中にあるのだ。唯その諸元素がはなれ〳〵になつて居て、結合してゐないまでゝある。化學者の發見はこれで盡きて居る』。博士また說いて曰く、『上述の事を考へて次ぎに下に說かんとする光景を想ひ見られよ。十二月の寒威凛烈な日にグラスゴウに住んで居るアラビヤ人の年少い乞食が、クライド河に架つて居る

ある橋を渡つて居る光景である。彼は寒むさうで飢餓に瀕して、住む家もないのだ。彼がその橋の片端に來たとき、炭火のストーブの中に蒸したての馬鈴薯を入れて賣りあるいて居る燒芋屋に出遇つた、蒸薯の佳香(いかはり)に刺擊されて飢餓は一層增した。その乞食は機會を狙つた揚句、蒸薯を一つ盜んで駈け出した。もう玆まで來れば大丈夫追ひ付かれる心配はなからうと思つた邊で、坐つてそれを喰はうとした。薯の一片を割つて食はうとした刹那に、突然彼は思ひ浮んだ。彼は飛び上つて元の處に馳せ戻り、燒芋屋に詫びて薯を返さうと思つて橋のところまでやつて來た。躓いて倒れた拍子に、大きな荷馬車が通りかゝつてその少年を曳き倒した。重傷のため彼は病院に運ばれた。漸く正氣に復つたとき、『あの男は薯を取つて呉れたか。私はあの人に彼の薯を返さうとしたんだ』と叫んだ。少年は何遍も同じ言を繰り返してその揚句とう〳〵死んでしまつた。諸君よ彼が正しいと信じたことの爲に一命を落すに至つた此小さい飢ゑか

つゑてゐた少年には、道德の力があつたのではなからうか。その道德の力は彼の身體を組織して居る化學的原素の中にはどこにも見出されないものでなからうか』。

道德の力は前に述べた呎封度（フイート・ポンド）で測量することができやうか。その力は全く光の勢力の巡廻の範圍外にあるのでなからうか。シャッター博士問ふて曰く、此少年の體が死んだとき何か生き殘つたものはなかつたらうか。人の手で造られなかつた「天にあつて朽ちない家」といはるゝやうな何ものかゞなかつたらうか。巡廻の範圍内にある勢力が破滅すべからざるものとすれば、巡廻の範圍外にある一層高尚な此の力は永久に生き殘るべきものであらう。かくの如く立論の根本に溯つて考究するときは、勢力保存說に基いた靈魂不滅に、反對の說を立てやうとする企は、反つてこれを證明する爲めに用ゐられるやうになるのである。敵の武器を奪ふて敵を擊つとは眞に此事だ。

英國現代の碩學「サア・オリバー・ロッヂ」が左の如く語つて居るが、これは多勢の科學者の意見を代表して居るのである。『若し吾人が否定的方面に馳せ、獨斷的な口調を以て、吾人は有りと有らゆる事物を物理學と化學の範圍内に入れてしまふことができると言ふなれば、吾人は自ら進んで狹隘な僞學者であることを廣告すると同樣で、實に嘲笑の標的とならざるを得ない。しかのみならず吾人は科學者としての生得權をさへ、豐かに且充分に享樂することができないのである』。

上に掲げた議論は靈魂不滅に反對する唯物論の要害であるが、公平無私の態度で具さにその論點を調べて見ると、その內容の乏しいことに驚かざるを得ない。實際未來の生活に反對する重要な議論はその中に一つもないのである。假りに一步を讓つて双方の議論の重味が全く平均して少しも輕重がないとしやう。その場合最も論理に適つた徹底的な事は、二つの中どちらか實利實效の多

い方を採ることであらう。吾人は既に靈魂不滅の信仰が非常に實利的であることを述べた。左れば誰しもその假定の方にその立場を定めることが當然であらう。別々にして一つ一つ考へて見てもそれ〴〵多大の價値があるが、それを殘らず集めて考へ合せて見ると、更に一層確實になる肯定的の觀察（又は思考）である。

神の存在に關する證據は他の論文で考究したことがあつた。故に爰にはその問題は既に決したことゝして論歩を進めやう。即ち吾人は人生の最大事實として聰明慈愛なる神の存在を認めるのである。聰明な神は聰明に行動せらるゝが當然である。人間はいくら最負目に見てもやうやくその可能的權力を發揮しかけたばかりである。人間各自の靈性の中には無限に發展する可能性を具へて居る。かくの如くあらはれたる可能性と、そが發達して修得せんとする藝能學識とは、有らゆるその被造物における神の最高の事業である。扨此の如きものを

發生せしめて、之より益々その可能性を開發しやうとする間際にこれを滅ぼして了ふことは、聰明の行爲として、これほど不釣合なことはなからう。何ものかこれに增したる狂氣の沙汰があらうや。何ものかこれより甚しい浪費濫用があらうや。聰明な神は今少し聰明に行動せらるゝ筈である。身體の死後も尙智力を具へた個人の存在が繼續するといふことは、吾人が期待して當然な事柄である。別に不思議なことでない。不思議なのは反て靈魂の起源であらうと思ふ。

若し神が萬民の父であつて人を愛するなれば、その行動はすべて愛から出る筈である。左れば神が人間に父子の優しい關係を與へ、その關係から生ずる思慕の念や欲望を與へ、潔き愛や不死の希望を與へて置いて、しまひには無慈悲にもこれに應ずることをしないで失望させるといふことは、仁愛なる天父の行動として不似合ではなからうか。若し神が吾人を愛するものとすれば、不死の希望はたゞその希望が充實さるゝことがあるといふ最初の閃に過ぎない。優美

なる愛はそれ自身に永久的の性質を具へて居る。今一度フイスク教授の名言を引用したい。即ち『予は神を信ずるが故に靈魂の不滅を信ず』といふ語である。ケーアド教授は上掲の論を左の如く言ひ直ほして居る。『予は何等他の眞理を信ずると同樣に固く神の存在を信ず。神在りとせば、彼は完全である。若し神が完全であるとすれば、彼は聰明で、全能で、正義である。若し神が正義且全能であるとすれば、我靈魂は不朽不滅である』。これ以外に論理に適つた結論はないのである。

或人いはく『人若し「神の靈汝等に住めり」といふパウロの語に同意した以上は、此の問題は殆ど決定したのである』と。此の言は大に道理にかなつて居る。若し神我等に住まば、即ち吾人が神の子供等であつて、神に由つて存在するものとしたなれば、吾人は神の性質の幾分かを有つてゐるのである。若し吾人の性質即ち吾人本體の實質が神のそれに等しいとして見れば、吾人は決して死ぬ

ものでない。吾人が死ぬるものとすれば神も死なねばならない。此論法の前提を正しいとして容せば、その結論は避くることができないのである。扨て又前提を否定するは全然神を否定するに等しい。神を否定するは人性から神を放逐して神の德を否定するに等しいのである。

以上掲げた各論點に就いて詳論することは願はしいことではあるが、殘念ながら本書にそれほどの餘白がないから、唯大要だけを述べることにしやう。近來一の新しい論が提出された。實をいへば新しい論でなく古い論であるが、近代の研究に基いて新しい力を得たので、面目を新たにして識者の歡迎を受けて居る。それは即ち連續したる有意識の個人的存在に對する精神學研究の關係である。吾人は爰に細かい事實を述べることはできないが、過ぐる二十五年間の心理研究の全體の趨勢が、靈魂不滅の信仰を强めんとする方向に進んで來たといふ事は安心して明言し得るのである。マイヤー教授は『人格論』と題する大著

述に於てこれを證明したと考へて居る。サー・オリヴアー・ロッヂは英國科學奬勵協會の會頭として就任演說のときかう述べられた。『既に驗定された事實は予にこの二つの事を確知せしめた。即ち記憶と愛情とは、それに由らなければ今爰にその作用をあらはし得ない物質即ち肉體との聯絡に制限されてゐないといふことゝ、今一つは、人格は肉體の死したる後も存續し得るといふことゝを予に確知せしめたのである』。記憶せられよ。こは英國の三大學に引續いて教授となられ、今は某大學の總長と、前にいつた英國科學奬勵協會の會頭を兼ねて居る科學者であり又進化論者であらるゝ人の證言であることを。この上に吾人がフイスク教授、ジエームス教授、ベルグソン教授、オイケン教授、その他彼と同等の地位を占めて居る多數の學者等が、各自の勉學や研究の結果として同じ結論を、彼等と等しい力と肯定とを以て證言して居ることを思へば、未來生活に對する信仰を維持する證據は、人間の學問と才能で能きる限りは餘ほど強

固なものである。

キリストの蘇生及びその事と靈魂不滅の問題との關係に就いていへば、吾人はキリストが磔殺された後肉體のまゝで蘇生されたか、或は他の方法でその姿を現はされたのか、それは大切な問題でないやうに思ふ。吾人はこれらの說のどちらかを何人にも信ぜさせる爲に瞬時をも費したくない。重要なことは唯キリストが現はれたといふ事實である。ポストン府知名の牧師ゴルドン博士は『靈魂不滅の證據』と題する有益な本の中に『キリストが蘇生されたと信ぜられたといふ事は有力な批評家等に由つて普ねく承認されて居る』と言ふて居る。これらの人々(キリストが死後に現はれたことを見た人々)は間違をしさうにないかつた。彼等は死なるゝ前にキリストを熟知して居つた。彼等は再現したキリストと共に歩み、彼と共に語り、彼を認識した。別言せば彼の現在居らるゝことを意識したのであつた。五百人以上も同時に彼を見た。且又彼等はキリスト

の再現を豫期して待つてゐたのではなかつた。だから最初彼等は容易に信用せず疑ふて居たのだ。愈々疑ふことができない爲め、不本意ながら信じたのである。かくの如くこれらの人々はキリスト再現の事實に對して有力な證人となるのである。

師と仰ぎ杖柱と賴んで居つたキリストが、一朝十字架の上で耻しい死を遂げられた後、弟子等は失望落膽した。彼等はもはや失敗に歸したと思はれた事業を見棄てゝ散亂しかけた。然るにたつた一日の中にすべて此光景を一變してしまふに足るほどの或一大事件が起つた。若し彼等の間にキリストが再現しなかつたら、どうなつたであらうか。若し此の事件が起らなかつたとしたならば、此世界に基督敎會といふものはなかつたらう。その理由は外でない。數日の中に弟子等は四方八方へ散つてしまひ、キリストの名は不思議なユダヤの改革者であるといふ以外、歷史には何一つその痕跡を留めなかつたであらうと思ふか

らである。今日世界に基督敎會の存在して居る事が、キリストの死後間もなく或事件が起つたに相違ないといふ確かな證據である。而して其事件たる、事變の自然的順路を突然變更して、人類の歷史に新しい轉變を予ふるに足るほどの極めて重要なる事件に相違ない。扨その驚くべき事件といふはキリストは生きて居られた。キリストは彼等の中にあらはれた。それだから彼の事業は失敗に歸したのではないといふ確信に外ならなかつたのである。

何事かこれよりも更に必要なことがあつたらうか。若しあればパウロの記錄にかいてある筈だ。どんな功績の著しい批評家にしろ、パウロが書いた羅馬書と前後哥林多書と加拉多書の四つだけの確實なことを疑ふものはなからう。この全く疑のない書翰中に、キリストの再現に關する言は澤山ある。この再現がパウロの敎の土臺であり基礎である。吾人はパウロが學者であり、キリストと同時代の人であり、又最初はキリストの勁敵であつたことを考へて見れば、パ

ウロが欺瀆れさうな人でないことは明かなやうである。此の如き人の筆に成つて千數百年傳はり傳はつて、近世の批評家等が充分研究の上大丈夫と言つた上掲の四書翰の證明は、極めて斷定的で、何人もこれ以上の證據を要求し得ないほどである。パウロ及び他の直弟子等も此點に於て正確でなければならぬ。若しそれが正確であつて、キリストがどうにかして十字架上の死後、その弟子等にあらはれ給ふたとすれば、キリスト自身の心靈不滅は確立したのである。何となれば、若し彼が消滅したものとすると再現することができない筈であるからである。扨各自の心靈はキリストのそれと質に於ては同一である。異なる點はその比例と發展の度合にあるのである。若しこの兩者が同じであるとすれば、その一つに就いて說明された事は、他に就いても證明さるゝ筈である。キリストの再現は一般の靈魂不滅を證明するに足るのである。何となればすべての心靈はキリストのそれと同性質であるからである。吾人はキリストが與へたまふ

た道德的確保即ち『我生くれば汝等も亦生きん』(約十四〇十九)といふ約束に滿足して安心することができやう。彼が十字架上に死なれた後何等かの方法に由つて再現されたことは、彼の生涯が驚くべき生涯であつたと同樣に、驚くべき事實である。

吾人は此章のあまり長くなることを案じるから、十五年許以前に出版された或有益な書物(The New Theodicy and Immortality by Rev. A. G. Gordon, D.D.)から、その大要を摘んで左の一節につゞめたのである。『信徒はそれが自分に關する事であるから、それに就いて賢明な判斷を下すことができまいかと案じる。彼の感情と個人的の興味があまり深く錯綜して居るので、何となく自身の思想に信賴すべきや否やを自ら疑ふやうになる。これは信仰の知的態度である。其信仰は目に見えぬ世界から保證せられ、來世の側から判定を得たと信ずる。其保證や判定は要するに吾人の信仰に有利な意見で同時に結局的のものであ

る。『心の清い者は神を見る』。心の清い者は信仰に由つて神を發見し、神の思想に立入り、彼等自身の思想に更ふるに神の思想を以てすることができる。信仰はその對象を直接に見る視力であると自ら宣言する。信仰は吾人をして神の側から眞理を見ることを得せしむ。吾人はその爲めに大に力を增して再び人間の側に戻つて來る。眞に至高者の思想に與からんとする此能力――即ち信仰に由つて神の宇宙的思想に考へ到り、且その宇宙的生活を生活せんとする此力倆は、人間の靈魂不朽の最も深い豫言である』。

吾人が靈性不朽の證據の輕重を量るに當つて、吾人はその問題の性質が許す以上のものを要求しないやうに注意せねばならぬ。吾人は明日太陽が昇ることを證明することはできない。しかし吾人は明日太陽が東天に昇らうといふ吾人の信仰が實際確實疑ひないと思ふ。それは言はず語らずの中に自然界の秩序に狂ひがないと信じて居るからである。それと同樣靈魂不滅に對する證據も追々

に積み重ねられて、愈々確實の度を加へるものである。道義的の秩序に對する吾人の信仰は漸次强くなる。强くなるに隨つて未來の存在に對する吾人の信念が恰も明日太陽の出ることを信ずるのと變はらないほど、それほど確實になるのである。合理的要求を滿足せしむるにはこれで充分であらう。

吾人はまた靈の事は靈に由つて辨ふべきであるといふことを記憶せねばならぬ。畢竟するに靈魂不滅は靈の事であるから、靈に由つて見なければならぬ。若しその人の心が靈に由つて導かれなければ、その人に取つて何ほどの證據があつても之を證明することはできない。吾人は飽くまで疑はうといふ態度の人々に對して、どうしても疑へない程に靈魂不滅を證明し得たとは要求しない。これは明日太陽が昇るかどうかといふことを爭はうとする人にキット昇るといふ證明ができないのと同樣である。かゝる人々の爲めには靈魂不滅の知的證據の多大ならんことを求むるよりは、彼等が一層能く事物の眞相を見得るやう

に、又これを一層正確に判斷ができるやうに、彼等の靈的性情を修養するに努めるのが必要である。人間及び神の性情に最も深い靈的見識を具へてゐた歷代の有らゆる偉人等が、來生あることを信じてゐたことを想へば、吾人は大に人意を强ふする感がある。彼等が養ひ得たところの靈的見識は吾人も亦養ふことができるのである。

一人の善い證人が法廷に立つて辯じても事實を確定することができないかも知れない。しかし有力な證人が多數あつて誰れも彼も、同じ事を證據立てたとすれば、互に證據の價値を强めることになる。彼等の立證は決定的と見られるかも知れぬ。吾人が呼び出した證人等は各々證據を提供した。時には多くの證據を別々に離して見ても、その證據だけで殆ど決定的であると思はれた。しかしこれらのすべての證據を一括して、吾人が餘儀なく省いて置いた多くの他の證據に結びつけて見ると、此事件は期待され得るかぎり强固になるのであ

る。吾人は本論の發端に於て、靈魂不滅に對しては何等物質的の議論の提出されないこと、且來生の信仰は非常に實用的實行的の信念であることを述べて置いた。今又吾人は之に對して多くの證據あることを見た。左れば吾人は此問題をすでに決定したものと見做し、吾人は無限の生存を生活して居るものだといふ事實に基いて、吾人の生涯の經綸を定めたらどうであらうか。左れば吾人は永久の價値ある事柄を吾人の生活に入るゝやうに決心ができないであらうか。

テニソン卿は確信した調子で左の如く吾人の信仰を表明した。

神がその聖業を完成し給はんとき
彼は一つの生命をだに塵埃の如く棄て給はじ

"Not one life shall be cast as rubbish to the void,
When God hath made the pile complete."

吾人はまたホイッチアと共に歌はん。

廣き葉を空中にかざす棕櫚多き
神の島々がいづこに在りや吾は知らず
吾が知れること唯一つあり
そは神の愛と守護を離れて
漂泊するを得ざること是れのみ。

……

神は既に吾が愛するものらを導き給ひぬ
彼に邪のあらんこと思ひもかけじ

"I know not where His islands lift
Their fronded palms in air;
I only know I cannot drift
Beyond His love and care.

……

"God hath led my dear ones on,
And He can do no worng."

吾人は使徒パウロと共にかういふことができる。

そは或は死、あるひは生、あるひは天使、あるひは執政、あるひは有能者、
あるひは今ある者、あるひは後あらん者、或は高き、或は深き、また他の受
造者は我儕を我主イエス・キリストに賴る神の愛より絶らすること能はざる
ものなるを我は信ぜり。

第五章　應報と救濟

宗教的事業及び教訓の終極の目標は救濟である。此點に於ては多く意見の相違を見ない。しかし救濟とは何であるか又如何にして救濟せられるかといふ問題になると、意見の差異が大きくなるのである。宗教界を多くの宗派に分裂せしめた爭論の大部分はこれらの兩問題に關して居る。人々が宗教の終極目的に就いて意見を述ぶるに方つて、互に了解し得ない爲に、如上の相違を生ずるのである。故に吾人は本論に深入りするに先だつて、救濟の意義を明かにすることが大切であると思ふ。

キリストは自らの事についてから仰せられた。『それ人の子は亡たる者を救はん爲に來れり』(太十八〇十一)。是に由つて考へて見ると、彼が此世に來られた目的は救濟であつたやうに思はれる。キリストはまた他の場合に別の語を用

ゐて同じ目的を陳べて居らるゝ。いはく『竊賊の來るは盜んとし殺さんとし滅さんとするの他なし。我きたるは羊をして生を得かつ豐ならしめん爲なり』(約十〇十)。かくの如く吾人は彼が彼の終極の目的を二つの形で示されたやうに思ふ。その目的とは人類を救ひ且彼等の生命を豐かならしめん爲めである。如上の言ひ方は二樣であるが、要するに同一事を說明したに過ぎない。彼が言ひあらはさうとした點は同一の點に歸着するのである。左れば救はるゝといふことは、キリストの予へられた生命を豐かに充たさるゝことである。

キリストの予へられた生命は品性である。品性でない生命は眞の生命でない。僞善でなければ一時的の衝動である。左ればキリストの予へられた生命は品性であり、又救濟である。故に救濟と品性は生命と同じであるから、つまり同一物であるべき筈だ。眞の救濟は品性である。完全な品性を具へた者だけが完全に救はれたのである。吾人はある自由思想家が動もすると考へるやうに、

人が品性に由つて救はれると言はない點に注意せられよ。若しさう斷言すれば、品性を以て品性以上のものに達する手段とするのである。これは大事な區別だ。救濟が目的である通り、品性も亦目的である。この兩者は歸するところ同一である。

左れば救濟とはどんな意味であるか甚だ明瞭である。救濟は品性である。實は救濟は完い品性である。

救濟即ち品性建造の經過は突如として起ることもある。その突然の變化、所謂新しい生活の發端が、何時何處で始まつたといふことを、明細に記すことのできることがある。又之に反して徐ろに始まつて、その進歩が漸次に顯はれ、何時何處で始まつたと判然言へない場合もある。生活又は品性の二つの種類はいづれも純粹である。救濟が開始されたにしても、それは進歩する事柄である。それが純粹であるとすれば、進歩的の救濟即ち品性建造である。又永久に

進歩を續けるであらう。その品性は限りなく豐富になり、その生命も亦益豐かになるであらう。約言せば救はるゝといふは品性を建設するといふことである。罪を見棄てゝ絶えずいよ〳〵高尚な生活に進みゆくことである。

完全な品性を具へない人はその人の信ずるところの如何に拘はらず、又その人の經驗の何たるに由らず、完全に救はれたとは言はれない。人はその品性の發展するにつれて幸福も增進する。何人も全く正しくならなければ全く幸福にはなれない。『神聖と眞の幸福とは一つであつて分割すべからざるものである』と言つたのは至言である。

自ら罪の刑罰を免かれ他人をしてこれを受けしめん爲めに、或は救濟の中に存する幸福を得ん爲めに救濟を求めて、他に何等の動機のない人は、其心機一轉せざるかぎり、決して救はれることはできない。これその動機が利己主義であるからである。利己的の動機は義しい品性を生じ得ない。刑罰を畏れ報賞を

望む心は人をして眞の基督者たらしむることができなかつた。この後とてもできなからう。かゝる觀念は眞の基督者を作り得ないものだ。宗教の中には甚だしく利己的のものがある。恐らくは世の中に間違つた宗教位利己的のものはなからう。無間地獄から人々の靈魂を救へといふ訴願の聲を聞いたことがあつた。即ち全幅の注意が自己の爲めに、或るものを避けて或るものを獲得することに注がれた。人間を救ふ動機はもつと高尚なものでなければならぬ。即ち義を求める精神に由らねばならぬ。義を求めるは常にその仁德に由つて人を召し給ふ愛に富める天父の意に順ふことである。その人はキリストに忠信である爲めに義を求めなければならぬ。救の力はキリストの生涯と教訓とに由つて彼を動かしたのである。彼は此世に在りてその使命を果たし　同胞に對して最高の奉仕を爲さんが爲めに、義を求めるのである。正義を盛にして此世の幸福を增進せん爲めである。神・キリスト・人間・及び眞理に對する愛に勵まされて正義と

眞理を生活に實現せんが爲めでなければならぬ。此の如き動機に由つて品性が建造されるのである。別言せば品性を造くる堅牢な材木はこれ以外にないのである。人間が、イエスにあつたやうな豐かな生命を己れに移すには、是非共此の如き動機に由らねばならぬ。

吾人はこれらの品性の救濟を生み出す今一つの動作に就いて述べて見やう。救濟の目的を達せしむる動作は多くあるが、吾人は唯その中の一つを擧げやう。それは即ち應報である。こは終極の方法ではない。恐くは最も大切なものでもなからう。しかし罪の存續する限りは、救濟の初期に於て重要な地位を占めて居る。慈愛の父が與へたまふ應報はその子の利福の爲めに用ゐらるゝもので、決してそれ以外の目的には用ゐられない。若しその子たる人間の爲めに用ゐられないで、復讐や憤怒の表明として用ゐられ、人間が絶望的な懊惱の狀態に陷つたとしたら、その刹那から應報は眞の救濟の原因ではなくなり、神は慈愛の

父でなく、反て殘酷な虐君となるのである。一派の神學說によると、神はその子たる人類の多數をいかにも無慈悲に取扱はるゝやうである。即ち限りなき悲慘の有樣に陷るるのである。若し此世の親がそれほどひどく子供等を取扱つたとすれば、世界の文明國の政府は此の如き人を捕縛して獄に投ずるであらう。左もなければ子供等を監督する資格のない親から彼等を引離すであらう。神の應報に關する吾人の觀念の中に、若しその罰せられた子の利福の爲めでないものか、或は滯りなく理解された場合に、結局その子の救濟に歸着しない何ものかがあるとすれば、吾人は悉くこれを取去らねばならぬ。

吾人は天父の愛は無限であるといふが、これは決して感傷的な弱々しい愛を指すのではない。愛は强いもので、眞に子の最大の利福の爲めに嚴重にせねばならぬ時は容赦なく嚴重にする。だが須臾も子の爲めといふことを忘れてはならぬ。神は義しい。しかし神の義と愛との間には矛盾がない。神の義が要求す

るところはその愛も亦これを欲し、神の愛が願望することろはその義も亦これを要求するのである。義しくない愛は聰明でない。愛と調和しない義は殘忍である。正當な刑罰は人を悔改めしめた以前よりも一際良い生活を送らしむるに足るものでなければならぬ。神の正義即ち眞の正義はこれを以て滿足するのである。吾人は道義的法則の世界に住んで居る。吾人は自然法を破つてその結果を避けることのできないのと同樣に、道義上の法則に背いてその結果を避けることはできない。吾人が道義上の法則を破つた結果は一つしかない。それが即ち刑罰である。嘗て犯されたあらゆる罪は大小の別なく、現世でか或は來世でかキツト正當の刑罰を受けねばならぬ。過去・現在又は未來に於ても、天國に於ても地上に於ても、其刑罰を免るべき手段は絕無である。『手に手をあはすとも惡人は罪をまぬかれず義人の苗裔は救を得』(箴言十一〇二一、)。『不義を行ふ者は亦その不義の報をうく、主は偏視たまふ事なし』(哥羅西三〇二五、)。正し

い刑罰は免かれることができない。是はまた罰せられる者の爲めである。神は刑罰を要むる譯でなく、唯從順を求められるのである。農夫は鍬を目的として所望するのでない。彼は穀物を獲んとするのである。鍬はそれを產出せしむるに必要な手段たるに過ぎない。その通り神も刑罰を願はれるのでない。神の願はるゝところは從順である。刑罰は從順を產出せしむべき手段として用ゐらるゝのである。それであるから萬人皆從順になつてしまへば、神はもはや刑罰を用ゐ給ふ必要はなくなり、刑罰はその終を告げねばならぬ。かくの如く子の爲めに課せられる正しい刑罰と神の博愛は調和されて居る。だが、永遠の刑罰と限りない天父の愛といふものは絕對的に矛盾して調和すべからざるものである。

刑罰は罪及び罪を犯さうとする氣質を滅するに必要で、且恩惠的手段であるから、罪の存在するかぎりは刑罰も永續しなければならぬのである。かういふ

理由であるから永遠の刑罰を正當とせんが爲めに永遠の犯罪の說が發明されたのである。これは素より此世の罪の爲めではなく、未來の生涯の永遠の犯罪の爲めである。品性は固定する傾きがある。人が永く罪を犯し續くるときは、その品性は固定してしまつて、變化することができなくなる。此最後の結論が生じないことを了解するには、吾人は左の事實に著目しなければならぬ。そは最も甚しい惡習慣に捉はれて居る最惡人—强烈な誘惑に屈從して改善の見込の極めて乏しい最惡人と雖も、稀には現世に於てすら變化することがあるといふ事實である。肉慾の誘惑は中々抵抗し難いもので、現世における罪の大部分は概ねこゝから生ずるのである。これらの肉慾は肉體の死滅と同時に無くなり、肉慾から來る誘惑も自然見捨てらるゝのである。斯の如き慾は全く立場を失ふてしまふ。吾人は死と呼ぶところの經驗を通過し、來生と稱する經驗を始むると同時に、悔改めて正義に進まんとする力は俄かに大に增大する筈である。『か

の時には面を對せて相見ん。又我が知らるゝ如く我知らん』。その時此世で罪の生活を送つた人の悲哀と慚愧とはどれほど深からうか。何人もこれを測ることはできない。その姦惡にして馬鹿らしき生活に由つて、飢やされ痩せ衰へさせられた自らの慘な弱い靈性に氣付いたときの心持はいかに。周圍にあるすべての靈があるがまゝの彼の有樣を見て居ることを認識したときの感想はいかに。しかしこれが悔改に向はうとする第一歩である。新生活に移らうとする序幕である。人が未來の生活に入らうとする矢先きには、眞理が新しい力を以てあらはるゝを見ん。神に對する愛と從順が、その人の愛や欲求の中に、これまでよりもズツト大きい場所を占めねばならぬ。正義は新しい意義を發揮し、純潔は新しい光氣に由つて輝くであらう。のみならず新しい有力な援助が生ずるであらう。即ち吾人は賢明な教師等に取卷かれるであらう。又吾人は未だ嘗て見なかつた正義の長い生活の天上の美に由つて輝かされた多くの靈を見るであ

らう。その時神は今よりも更に眞實に思はれるであらう。而してすべてこれらのものはこの世では何人も知らなかつたほどの善に遷る感化力を及すであらう。

若し夫れ正義に進むべき便宜比較的弱く、之に反して誘惑甚だ猛烈なる此人生に於てすら、最も剛愎なる人物が時折變化することありとせば、況して未來の生活に於て、かゝる人々が全然變化することなしと言ふを得んや。未來の生活には誘惑も多からず、遷善の便宜はその力を增加し、その効果も百倍するであらう。たとひ一度たりとも神がその目的を誤らるゝことあらんと言ふものありや。吾人がその問題についていかなる見解を採るにせよ。罪は結局滅絕すべきものである。隨つて刑罰及び罪に關する他の結果もこれと共に痕を絕つべしといふ結論に達せざるを得ない。吾人はくり返していふ。罪が滅した場合には、刑罰はすでにその働を爲し了つたのであるから、消滅すべきであると。

吾人は從來永く維持され今日でさへ或方面に於て一般に信用されて居る偏見が、恐くは眞でなからうといふことを證明しやうとした。吾人の博大な意見を明かにするには、更に積極的に或る論據を示さなければ此章を完璧とすることはできない。故に極簡短にその論點を左に述べて見やうと思ふのである。

博い方の見解の由て以て立つところの基礎は、若し神が父であれば、彼は父らしく行動すべき筈であるといふ事實に據つて居る。吾人は神に就いて知ると知らざるとに拘はらず、神に前後矛盾した點のないことを知つて居る。吾人は神の性格に關する吾人の概念の中に、父たる性格と撞着した元素を故らに容れて置いて、神にあらはれて居る父の性格はかやうに行動されない筈でないといふ權利がないのである。神は矛盾のない前後一貫した父であるべき筈である。神に期待し得る行爲はすべて聰明にして慈愛に基いて居る。慈愛の父の譬喩と呼ばれて居る放蕩息（はうたうむすこ）の譬喩（路十五〇十一―卅二）の中にイエスが神に就いて

描かれた光景の中に見ゆる通り、慈愛の父は常にその子の歸宅を待ち望んで居るのである。眞に悔改めて歸る場合には、神はいつでもその子を歡迎されるのである。若し神がある一定の時までは歸り來る悔改者を受け給ふが、その時以後は受け給はないであらうといへば、それは眞の父たる性格に矛盾するやうに思ふ。此の如きは復讐と殘忍の精神から出るのである。若し神が慈愛の父であるとすれば、悔改の機會は永遠に存すべき筈である。

若し神が無限であれば神に屬して居る性質能力も等しく無限である。若し此論據にして確乎不動のものとすれば、その結論は知るべきのみである。若し神が愛に於て無限なれば、神が萬人を救はんことを所望し給ふや疑ふべき餘地がない。苟も善心あるものは皆これを願ふのである。若し神が智慧に於て無限ならば、彼は人を救ふべき道を知つてこれを行ひ給ふ筈である。若し神が能力に於て無限ならば、人を救濟し得ない謂はれがない。若し人がある事を爲さんと

欲はじ、彼はいかにしてこれを爲すべきかを知りて實行するであらう、彼もしこれを爲す決心あらば、何ものも彼を妨ぐることを得なからう。若し神が愛と智慧と能力とに於て無限ならば、彼は萬人を救はんことを欲し、その方法を知り、且これを實行されるであらう。若し神がこれを欲し、その方法を知り、且實行せば、彼は萬人を救ひ給ふであらう。そを妨げんとする力は天にも地にもあるまい。もはや此の結論から遁るべき論理に適ひたる途はなからう。然り絶對的に有り得ないのである。人或は言はん。神はしか爲さんと欲せらるゝであらうが、人がこれを欲しないであらう。果して然らば人は終に神の意を失敗に歸せしむることになる。左れば神は無限といふことはできぬ。後に說明する筈であるが、神は恣に人を救ふのではない。神は人間からその自由を取去り給はない。しかし神は萬人をして隨意に欣んで正義を採用し、潔き貴き品性の中に正義を吹き込むるやうに納得させるまでは、その事業を止め給はないであらう。

若し又キリストが成功され、彼が成し遂げんと言はれたことを成就さるゝなれば、光榮ある勝利は終極の結果となる筈である。キリストが永生を萬人に與へん爲め、神はあらゆるものを彼に與へたまはんと彼自ら明言した(約十七〇二、三、。同六〇卅七—卅九)。若し彼がこれを成し遂げないとすれば、彼は自ら爲さんと企てた事、又そを爲さんが爲めに遣くられたことを成し得ないのである。未來の事に說き及ぼされた場合に、彼は『我もし地より擧れなば萬民を引て我に就せん』(約十二〇卅二、)と宣ふた。彼はその言の如く十字架に擧げられた。左れば結局萬人を引いて彼に來らすことができなければ、彼は失敗したのである。彼が自ら爲さんと明言されたことを成し遂げ得ない譯である。キリストが同じ目的について述べられた節はこの外にも多くある。彼の敎の全部が此の目的と一致して居る。彼の敎の全系統が、此の必捷的目的はすでに確立した事實であるといふ信念の上に立つて居る。

バウロは人間が洩れなく救はるゝ事に就いて幾度となく明言した。彼いはく『此は善事なり我等の救主なる神の意旨に適ふこと也。萬人救をうけ眞理を曉るに至るは神の望み給ふ所なり』(提前二の三、四)。いかなる語を以てするも、これよりも明瞭的確に萬人救濟の事實を陳述し得ることはできまいと思ふ。これと同樣の經論に歸する語を、何程でもバウロの書翰から引用することができるが(哥前十五〇廿二—廿八、腓二〇九—十一)、實はさうする餘白がない。單に萬人の心靈が結局救はるゝといふ信念の根柢を表明して居る思想の要點を示すには、上文に引用した丈で充分だらうと思ふ。夫れ以上多く引用する餘白を吾人は差當り有たないのである。

萬人救濟の教理が廣く初代の基督教會に行はれたといふ事實は、錚々たる宗教史家の皆一致するところである。ハンソン博士は吾人に告げて、初めの世紀頃に於ては『偉大なる神學の教師等は殆ど洩れなくこの教理を信用した人々であつた』と言つて居る。初め五百年間基督教國全體に神學の學派が六つあつた。その中四つ丈が重要な學派であるが、これらの學派はあらゆる人間が結極神聖の域に達して幸福を受くべきことを教へた。殘る二つの小さい學派の中で、一つは滅亡を說き、他の一つは限りなき悲慘を說いて居る。以上は極めて大切な事實で、キリスト以後數百年間どんな考が廣く行はれてゐたかといふことを證明するに足るのである。萬人が普く救はるゝといふ信仰が異端として排斥されたのは、西曆五四四年が最初であつた。その年姦惡なジャスチニアン皇帝が、コンスタンチノープルに召集した小さい地方的會議の際に決せられたのであつた。しかし反對の感情が强かつた爲めジャスチニアン帝でさへこの決議を實施することはできなかつた。

以上述べた如くキリストとバウロは明かにすべての人が終極に洩れなく救はるることを教へた。又この教はキリスト以後五百年の間廣く世に行はれた。左

れば何故に中世暗黑の時代及びその以後になつて、人間がその死後限りなき悲慘に墮つるといふ說が一般に行はるゝに至つたであらうか。此說がキリストから出たのでなくて、何處から來たのであらうか。これは興味あり且大切な問題であるが、歷史は容易にこの問に答へることができるのである。

第四世紀の初めローマ皇帝コンスタンチンが基督者たることを告白した。その例に倣ふて多勢の者が異敎を捨てゝ、彼等の皇帝の宗敎に歸依した。コンスタンチン帝が改信して從來の思想を一變したといふ事の覺束なかつた通り、帝に倣つた連仲も同樣、若くは更に一層皮相的であつたであらう。中世の初め頃の敎會に於ける神學の敎師等は概ね羅馬法から轉じた人々であつた。基督敎の神學は彼等の先入思想なる法律や彼等の元信じてゐた異敎に由つて多少變化された。これらの人々が外部から輸入した思想は追々蔓延し、又錚々たる人達に由つて敎へられたので、その思想が即ち基督敎の敎旨のやうに思はるゝに至つ

たが、實はさうでなかつた。間違つた先入思想に誤られないで、虛心平氣に信憑すべき敎會史を繙ひて見ると、この意見を證明すべき事實を見出すことはいと易いのである。フエーアベルン敎授の如き卓越な學者が左の如く言ふて居る。『多くの人々は異敎的の迷信や異邦人の哲學を離れて敎會に入つて來たが、彼等が同時に持參したものがある。打棄てゝ來た方がよかつたらうと思はれる幾多の妄想や卑陋な習慣などを持込んだのである』。死後惡人等が永遠の悲慘に墮ちるといふ敎理はこれらの妄想の一つであつた。吾人の了解した通りこれはキリストの敎ではなかつた、これは元來異敎の敎であつて、五世紀以後輸入され、基督敎の名に由つて廣く敎へられたのである。この事は聖書の中に敎へてないし、異敎界から持ち込まれたまでは敎會內に敎へられなかつたから、その出處は極めて明瞭である。これは異敎の敎理であつて、純粹の基督敎とは氷炭相容るべからざるものである。數百年來基督敎會に行はれてゐた通俗な敎

に比べて見ると、事實が吾人に要求するところの此の結論は或人々に取つて大に驚くべきものであるかも知れない。

此章は論爭を挑む精神で書いたのではなく、又讀者の心にかゝる精神を惹起すつもりでかいたのでもない。全く眞理と進歩とに資せんが爲めにかいたのである。現代のあらゆる進歩的宗教思想が傾注せんとしつゝある歸向點を示さん爲めに書いたのである。苟も現代の思潮を研究した者はこれを疑ふことができない。一部の日本人は基督教が日本人の心に適しないことを主張するが、實際それは基督教に反對するのではなく、外部から基督教に持ち込まれた或誤謬に反對するのである。吾人は純粹の基督教がこれらの異教的誤謬から分離されて說き示さるゝやうに、その誤解を取り除くつもりで此章を書いたのである。かくすれば基督教は進歩的人心に適合した眞に合理的宗教であることも分り、又心靈に對するあらゆる道義的及び宗教的要求を充たすことができるのである。

且又神は愛の神であること、現世及び來世に於ける神の應報は完い救、即ち完い品性を產出し、併せてその幸福を全ふせん爲めに謀りたまふ神の愛の動作(はたらき)の一部であることが、明かに了解されるであらう。

第六章　必勝的宗教使命の緊要

吾人は前章の後半に於て、正義の終極的勝利及びあらゆる神の子供等の終極的神聖と幸福とに對する信仰が由つて以て立つところの積極的根據の一部を示した。キリストはたとひ一個の心靈に就いてすらも、最後の失敗を見るといふが如きことを知らなかつた。最後の勝利を得るといふ確信は瞬刻も彼の心を去

らず、常に彼に力を與へた。この信念は彼の精神・彼の教・彼の生涯の上に驚くべき結果を顯はした。彼はその事が嘗に彼一人に取りてのみならず、彼の弟子等に取りても實際大切であることを明かに感じた。彼いふ『小き群よ懼るゝ勿れ。爾等の父は喜び、國を爾等に予へ給はん』(路十二〇三二)。『我は此牢にあらざる別の羊を有てり。彼等をも引來らん。彼等わが聲を聽ん。遂に一の群一の牧者となるべし』(約十〇十六)。吾人がすでに論じた通り、パウロの書翰の中にも、同じ普遍的勝利に關する信仰を最も强い言葉を以てかきあらはした文句が澤山ある。かくの如く的確に表示され、且堅固に信ぜられた眞理は、必ずや屢々キリスト及び使徒パウロの唇頭に上つた筈である。これは强固な樂觀的な又必勝的な宗教上の使命である。この使命は窮りなく緊要で、又現今の日本に特に必要なものである。かくの如く必要であり、又イエスやパウロの考へられた通り大切であるに拘はらず、今日日本の基督者の中にはこれに同意しない

連中がある。彼等いはく、『然り萬人が救はるゝであらうといふことは眞であらうが大切な事ではない』と。これらの人々は嘗て人の心に入つた最も驚くべき且深奥な眞理であるこの事に對して無頓著千萬である。『眞ではあるが大切でない』とは何の意ぞ。萬人救濟の赫灼たる希望の光を認め得た人よ。御身の同胞が一人も洩れなく愚昧と罪惡と悲慘から救はるゝことを何故大切ならずといふや。君の言ふところは果して眞意から出たか。一つの心靈が永久の悲慘の中に絶望的に消えゆくべきものとせば、その關するところ極めて大切ではないか。若しその亡びんとする心靈が、君の父であり母であり、子又は兄弟又は姉妹、或は君に最も親愛な人なりとせば、それこそ大切ではないか。君は果して自ら言ふところの眞意を認め居るや否や。一日大洋を航行する一大汽船の甲板上に『誤つて海中に陷つた者がある』の叫聲を聞きたりと想像せよ。その航海中彼と共に旅行しつゝあつた彼の子息以外の者には全く我關せずの態度を持せし一紳

士は、その聲を聞いてやをら椅子より立上り、冷靜に『恐くは水夫の一人だらう』と嘯いて、再び元の席に復して讀書を續けたのである。やがて船客の一人彼の許に馳せ付けながら、『あなたの御子息が。あなたの御子息が』と叫んだ。其時紳士は飛び上つて狂人のやうに甲板上を馳け廻り、逢ふ人毎に吾が子を助くることを求めたのである。海中に陷つた者が彼の子息であつた事が、前には不大切と思はれた事を、今は一變して極めて大切な事と思はしめたのである。假定せよ、その子が救はれる望があるといふ事はその人に取りて少しも大切でない事柄であらうか。ある人の救が吾人に取つてどれほど大切であらうかといふ事は、吾人がその人をどれほど愛するかといふ事に由るのである。人と人との關係に於て、吾人がその人と何程親密であるかといふことに歸著する。別言せば四海同胞であるといふ偉大なる信念を、吾人が實生活に於てどれほど徹底的にあらはし得るかといふことに歸著するのである。

此大事實に對する無頓著と基督が天國の譬喩中に說かれたものとの間には天地の差である。キリストが用ゐられた最も美しい譬喩の一つに、牧者が九十九匹の羊を羊牢に殘して、見失はれた一匹を探す爲めに暗夜に種々の危險を冒して出て往つた話がある。彼がそれを發見するや大いなる喜悅を以て伴れ歸り、仲間の者等を呼びつどへてともく〳〵に怡んだ。イエスいはく『かくの如く一人の罪ある者悔改めなば天に於て喜あらん』。讀者は又記憶さるゝであらう。放蕩兒の譬喩に於て、その兒が父の家庭に歸つたとき、その父が非常に悅んだことを。これに由つて考へて見ると、一人の人の救はるゝことは大切な事柄であり、苟もキリストの從者たるものがこれに對して冷淡或は無頓着にあるべき筈でないのである。尙更あらゆる人の救濟は限りなく大切な事であり、又吾人がこの事を想ひ回らすときは無限の喜びが胸中に湧き起るのを覺えるのである。夫故『眞ではあらうが大切な事でない』などゝ言ふ人は、その心に思ふところを

有體に明言しない人だらうと考へざるを得ない。

吾人は今少しく此信仰の實際的價値を調べて見たい。第一、この信仰が成立しないとすると、神の父たる性格は無くなつてしまふのである。人間の中の或者がその死後限りなき悲慘に陷るといふ教理と、神は人の父であつて、其愛は無限であるといふ教理とは、絶對的に撞著して氷炭相容れざるものである。故に兩方とも眞であるといふ譯には行かぬ。若し前者が眞であるとすれば、後者は眞でない。だからその爲めに神の父たる性格がくづされてしまふと、神その者も殆ど消滅する危險に瀕するのだ。神が無くなれば、吾人の愛し且拜すべき何ものも存在しなくなる。著者は正直に告白するが、若し予がこの非基督敎的敎理を信ずれば、予が說かうとする福音は無くなるのである。予に取りては說敎を全然中止するより外に途はないのである。この極めて眞實な宣言を爲す者は決して予一人に止まらない。予は幾百幾千の基督に從ふ男女を代表して居る

のである。彼等はいふ『人を限りなく悲慘に陷るゝやうな復讐の神を神として拜するよりは、寧ろ予は神なきを優れりと思ふ』と。上に述べた必勝的な宗敎の使命は極めて大切である。若し吾人が論理的であり、且徹底的であるなれば、福音そのものはこの敎理に根據を据えべきであると思ふほどである。

第二にこの敎理が人の心を慰藉する力の大なることは、凡そ人間に知られて居る敎の中で他に匹儔がない。どんな場合にでも人を慰むることのできる唯一の信仰はこれである。艱難の場合にこの信仰に由つて力を得た例は澤山あるが、爰には唯二つ丈を擧げて見やう。嘗て著者が牧會の務を負ふてゐた時分に、罪ある生活を送り罪の中に世を去つた人の寡婦を見舞うたことがあつた。此家に入つたとき、我等は此婦人が無愛想な又腹立たしい顏付をして居るのを認めた。慰藉と同情の言葉で話しかけたとき、彼女は荒々しい調子で怒つたやうに答へた。自身は思ひ存分惡い事をして一生を送るつもりであると言つたの

である。何故こんな調子外れなことを言ふたか、その原因を探つて見たら、左の事實を發見した。それは偏屈な保守主義の牧師が彼女を訪づれて、彼女の亭主は今頃は地獄で限りなき苦悶をして居るだらう。それだから彼女も早く悔改めて教會に入り亭主と同じ苦痛を蒙るやうなことのないやうにと、警告したのであつた。彼女はその牧師の說に反抗して是非ともその亭主の居る同じ處に行かうと決心したのだ。彼女は前の牧師が彼女に話したのが即ち基督敎であらうと想うて、我等と話すことを拒絕した。其時我等は前牧師の話したのは眞の基督敎ではなかつたことを彼女に告げた。尙進んで左の諸の事柄を彼女に說き聽かしたのである。死んだ爲めに彼女の夫の品格に變化を生じないこと、未來生活を始むるに當つて彼女の夫は人類の階級に於てズット低い地位を占めて居ること、即ち彼が現世の生活を終つた點を起點として新たに未來生活を始むべきこと、彼は必然自らの罪の正當な刑罰を受けねばならぬこと、しかしその刑罰

は、現世に於て神の刑罰が課せられるのと同一の旨意に從ひ仁愛を旨として、その人の爲めを主として課せられることと、是等の刑罰やその他の感化は彼を悔改めしめ、相當の時期に及んで赦免さるゝこと、彼は罪を憎んで正義を慕ふやうになるべきこと、改善すべき機會が彼の目前にあらはるゝこと、彼に正しい方を撰ばせやうとする善い感化が現在よりもズット有力になること、傑れた人又善人の個人的助力が一層直接になり且積極的となること、彼がいよ〳〵賢く强く且善良になり、とこしへに神聖と幸福の益々高い程度に進みゆくべきこと、彼が未來生活に於て進步しつゝあるやうに、彼女も亦同じ方針に向つて進むことが彼女の義務であり又利益であること、かくせば彼女は未來良人と會合することを得べく、その節には兩人とも現世にあつた時よりも一段高い地位を占め、とも〳〵に限りなく完全と幸福に向つて進みゆくべきことを彼女に話したのであつた。彼女が我々の話を傾聽してゐた間に、疑惑の雲霽れ、憤怒反抗の

様子は消え、その代りに平和と欣喜の情があらはれた。彼女は暫し打ち案じながら坐つてゐたが、終に左も滿足さうな微笑を浮べつゝ我等に向つて言つた。『御話しの筋は尤であります。それは道理にかなひ、眞であり、且美しう御座います。私はそれを信じます。私は力の及ぶかぎり善い生活を送りたいと存じます』。

今一つの例は飲酒過度の爲め突然死んだ人の事である。著者が將さに此人の葬式を營む筈になつて居つたとき、彼の妻は予の許にすゝみ寄り感激した樣子で予に問うた。『承はりたいが、神は私の夫を無間地獄に墮して永久に彼を苦めるであらうか』。予とその婦人との談話は大體前に述べた通りの道筋を辿つた。さうしてその日はその家族と共に葬式に列したり、この大いなる眞理をその種々なる關係から說き示す爲めに費やされた。其晩寡婦は予に語つた。『今朝から今まで私の心中に起つた變化は實に著しいものです。その時私は全く斷

腸の思をしてゐました。今は全く平和を得ました。神の御助けに賴りまして主人はその內、この世で得られなかつた捷利を得ることができるだらうと存じますから、私は夫と共に喜ぶことができます』。

以上はその他の手段が功を奏さなかつた場合に、惟りこの眞理が人を慰藉することのできた無數の例の中のタッタ二つに過ぎません。若しこの眞理がこれらの最も困難な場合に慰藉を予へることができたとすれば、義しい人々の死んだ場合に、その喜は更にどれほど多大でありましやう。愛された妻子やその他の遺族等は、この信仰の目を擧げて彼等が榮光の中に、とこしへに神に向うてその道を辿り行く有樣を想像し得るであらう。此の如き眞理を大切でないと考へる者は、必ずや悲哀に沈み窮乏に惱む人類を祝福する特權を神から得た人でなからう。

佛敎若くはその他の宗敎を信ずる東洋の人々が、似て非なるキリストの敎を

聞き、彼等の祖先等が限りない地獄に墮ちたことを言ひきかされたとき、かくの如く彼等をその祖先等から隔離する宗教は、その何宗たるを問はず、斷じて信じたくないと答へたさうである。此の如き例は一二にして止まらないのである。彼等は祖先等が往いた處に往かうと欲ふのである。苟も思慮ありて迷信妄執を脱したる合理的人物は、彼等のこの決斷を尊敬せねばならぬ。かくの如く吾人が說くところの必勝的宗教使命が、大膽且積極的に唱道さるゝならば、日本に於ける基督教の進步に對する一大障碍はこれに由つて除き去らされるだらうと信ずる。

第三に凡そ何かの改革に從事する人に取りては、彼が著手して居る事業が、早晩キット成功すると信ずることが、精神的ではあるが非常に効果あるものである。邪曲であり虛僞であることは必ず撲滅されんければならぬ。正義であり眞實であることは必ず行はるべき筈である。己れの弱きを勵まして努力しつゝ

ある者、又は誘惑と劇しく鬪ひつゝある者に取りては、彼は神の祐助に由つて必ず捷利を得るだらうと信じてかゝる事は非常に有効である。長い進軍の爲めに疲れ、又は戰場で負傷した兵士がもはや何もできない、もう一步も進めないと感じることがあらう。意氣銷沈して將にその場に倒れ運を天に任かさんとする矢先きに、戰線の劈頭から『捷つた』といふ叫聲が傳はつて來たとすると、彼はどうするであらうか。此の喜ばしい叫聲はこの兵士をして其疲勞を忘れしめ、傷をも打忘れて勇ましく再び戰線に立ち、捷利を全ふする爲めに自らもその責任の一部を盡すことを願ふであらう。人生の戰に於ける兵士もこれと同樣である。彼は効果なき努力に苦痛をつゞけ、屢々重傷を負ふて身心共に疲れ、絕望の中にその戰を中止せねばならぬと思ふであらう。その時彼は確かに捷利の叫を聞くのである。偉大なる大將は前列から彼に傳令を馳せてかく言はしめるのである。『我もし地より擧げられなば萬民を引きて我に來らすべし』。『懼

るゝ勿れ。汝等の父は國を汝等に與へ給ふべし』。是に於てか彼は勇氣を倍して自己の義務を全ふし、大將を助けて捷利を得せしむるのである。捷利を信ずれば半ば捷利を得たやうなものである。吾人はこの喜ばしい眞理の無形の勢力を充分に測知することができない。

成可く吾人の心を光明の側面に向けて、萬事を樂觀する習慣を養ふのが大切だといふことは、近時吾人が屢々耳にするところである。いかにも偉大な希望を懷いて居ると、これがその人の心意に及ぼす結果は著しい。大望は些々たる誘惑から人を救ひ出す力がある。パウロも『彼等は望を得ることに由て救はれる』というて居る。希望は日光である。日光は身體の健康に必要である。それと同じやうに、心靈内の日光は心靈の健康に必要である。心靈の天空における最も赫灼たたる太陽は吾人が今述べつゝあるところの信仰の太陽である。

如上の關係は世界いづれの國に於ても眞であるが、特に現今の日本に必要で

ある理由が少くとも一つある。今や悲觀主義が日本の思想界に瀰蔓して居る。意氣沮喪絶望のあまり自殺する者が寡くない。年々自殺する者が多數に上つて居る。而もその中の多數が前途有望であるべき青年仲間に多い。これは非常に危險な事情が潜んで居ることを示すのである。この危險な狀態を治療すには、吾人がこゝに述べて居る宗教的使命が予ふる合理的樂天主義に由る外に途がない。深くこれを信じ且これを生活に實現する人は決して厭世的に傾かない。また希望を失うて自殺するやうな憂がない。若し年々歳々此の使命があらゆる國・あらゆる都會・あらゆる村落・及びあらゆる講壇から說かれ、更に新聞雜誌で敎へられ、國内のあらゆる宗敎家に由つて唱へられたとすると、厭世主義は一片の黑雲のやうに天涯より拭ひ去られ、日光と喜びがその代りに顯はれるであらう。自殺は極めて鮮く、生活に新しい感興が生ずるであらう、この敎に由つて人生が一層良く理解され、世人が人生の價値を了解し鑑識すること一入深くな

るが爲めに、爰に變つた事情を生ずるであらう。この教は特に現今の日本の爲めに必要である。

前章中に吾人は神聖と眞の幸福は緻密に連結して分離すべからざるものであるから、人は完全に義しくなるまでは完全に幸福になり得ないと述べた。これは本當であるが、それにしても彼の同胞が悲慘の中にある間は、その人は完全に幸福になることができやうか。その人が眞の人間であるとすれば、彼はかゝる場合に幸福になれないのである。人間が完全に近けば近づくほど、人類に對する愛は强くなるのである。彼の愛が增加すればするほど、彼を人類と繫ぐところの同情が深くなるのである。些少の罪にも汚れず、利己心を超脫し深い愛と優しい同情に由つて同胞人類に繫がれて居る人に取りては、兄弟の一人でもが悲慘の狀態にあるかぎり、到底完全な幸福を感じ得ないのである。將來救はれた人が、吾人が今日認めて以て善人と爲すところの人に劣り、且同情を缺

いた人とならざる限り、一人の限りなき悲慘はあらゆる者の限りなき苦痛を意味するであらう。その結論として一人の終極の完全な幸福はすべての人々の終極の神聖と幸福を必要とするのである。少くとも凡ての人々が罪と悲慘の中から再生する機會あることを許さなければならぬ。故に眞實の意義に於てはすべての人の救濟を豫定せずには、何人の完全な幸福も成立ち得ないのである。是に於てか萬人が最後には救濟さるゝといふ事が極めて重要な事件となるのである。この事は活ける宗教の眞諦を形造くるのである。まだこれまでに此點に達し得なかつたすべての宗教思想が、今や此方向に歸着しやうとして居るといふ事實は、正さしくこの事の大切な所以を證明して居る。

然るに此の教理に對して全く異つた態度を持する一派の人達がある。彼等はその教理を眞であると信じないのである。彼等は屢々詰問していはく、若しすべての人々が救はるゝならば、何故態々その事を說教するを要するや。最早何

をも說教する必要なきにあらずや。何ぞ努力するを要せんや。何すれぞ君の兄弟の安寧に就いて焦慮するの要あらんや』。彼等またいはく『萬事萬物自然の成行に任かせて置いて善くなれば、坐視放任するに若くものあらんや』。

これは全然誤解である。吾人の主眼とするところは現世又は來世に於て刑罰から救はれることでなく、唯罪惡から救はれることに關してゞあることを御記憶願ひたい。吾人が主張する救濟は無條件ではない。又無條件であらう筈もない。救は神若くはキリストと雖も、無條件で恣に人に與へることのできないものである。パウロいはく『恐れをのゝきて己が救を全ふせよ』。これその條件の一つである。人は各自に己れの爲めに爲すべき事と世の救の爲めに爲すべきことがある。自ら爲さねばならぬ事は何人も代りてすることができない。人類中の個人が各々その爲すべきことを爲し終はつた時、始めて萬人が救はれるのである。その時節到來するまでは萬人の救濟は覺束ない。何一つとして自然のまゝに改まるものはない。是までにもなかつたが、今後もそんなことはなからう。これは特に注意すべき事實である。事物の改善は神と協同して働く人の勞力を常に要するのである。神は萬人を救はない。萬人救濟の敎理は神が萬人を救はるゝのであると說かない。吾人は左の如く主張するのである。凡ての人が神の祐助に由つて自ら救ふことのできる大經綸を、神が定め給うたと言ふのである。神はその經綸の實施されるのをみそなはし給ふ。神の經綸は一たびも失敗に歸した例がない。各人は己れ自身の爲め又その他の人々の爲めに、神の經綸が彼に要むることを爲すやうに意を注がれた。神の經綸はキリストに於てあらはれた通り、協力と愛と敎と訓諭の經綸である。凡そ人類の幸福を進むる爲めに、現今世界に行はれて居る最善の經綸はこれである。結極すべての人々は自由に喜んで邪を捨てゝ正に就くやうになるであらう。神の計畫は人間各自をしてその兄弟の安寧の爲めに責任を負はしめるのである。吾人は銘々光榮ある

終極に達するまで說敎し示導するのである。限りなき悲慘を信ずる輩は、この說敎や敎育や事業が、神及びキリストの計畫や事業ともろ共に失敗することを主張するのである。若し夫れ個人の場合における失敗に至ては、その數擧げて算ふべからざるほどである。これに反して吾人は終極にはあらゆる場合に成功すると主張するのである。これが双方の意見の相違である。だがその差や、無限に廣く又窮りなく長いのである。

吾人は吾人の兄弟の番人である。吾人は今日わが兄弟の安寧幸福に對して責任を負ふて居る。彼は孜々としてその偉大にして光榮ある目的に向つて進みつゝあるのである。吾人は及ぶかぎり彼を扶けなければならぬ。說敎せよ。敎へよ。働け。導き且助けよ。これ君等の力にかなふことである。君等の義務である。又かく爲すことは神意にかなふ。即ち神の經綸に從ふのである。

今一つ言ふべき事がある。若しこの事が眞である以上、君等はこれを說かね

ばならぬ。その結果のいかんを恐れずに眞理を說けよ。神が眞理を君等に與へられたのは獨り秘密にこれを樂む爲めでない。君等をしてこれを世人に頒たしめんが爲である。眞理の在るところには神在ます。神の在ますところは萬事安全である。嘗つてチャールス・サムナアがかう言つた。『よし天空が墜落することがあらうとも、眞理を擁護せよ。だが天空の落つる憂はない。蓋しかくの如く維持せらるゝすべての原則は宇宙を支へるところの柱であるからである』。

終りに臨んで敎役者諸君に向つて特に一言を呈したい。問ふこと勿れ。『是はこの人若くはあの人の信仰ですか。それはこの敎會又はあの敎會の敎旨ですか』と。宜しくかく問ふべきである。『それは眞ですか』。若し諸君が眞であると信ずるならば、若し君等がこの偉大な樂天的な必勝的宗敎使命を信ずるならば、諸君は宜しく明確な語を以て、これを世界に宣傳すべきである。左すれば諸君の同胞をして神が萬人の父なることを一層切實に認識せしめることがで

きやう。四海の民皆同胞であることを一層深く實現せしめることができやう。諸君は悲む者を慰藉することができやう。諸君は失望落膽する者を奮勵せしめることができやう。諸君は世人を安全に導くところの煌々たる明星たる運命を啓示することができやう。諸君は現代が切に要求して居る愉快にして有益なる福音を宣傳することができやう。

第七章　救主キリスト

彼自身及び彼の使命に關するキリストの觀念は甚だ單純である。彼は自からを天父を知れる神の子と考へ、又天父の意志を宣言し、その品性を啓示し、こ

れに由て救の道を示さん爲に遣はされたのであると考へた。キリストいはく『我を愛せざる者は我言を守らず。爾曹の聞くところの言は我言に非ず。我を遣しゝ父の言なり』(約十四〇廿四、)。『わが天より降りしは己の意の任を行はんため爲めに非ず。我を遣しゝ者の意のまゝを行はん爲なり』約六〇卅八、)。『イエス彼に曰けるは我は途なり眞なり生命なり。人もし我に由ざれば父の所に往くこと能ず』(約十四〇六、)。以上引用した事は偉大なことではあるが、道理に反したことでなく、神と人の自然にして且單純な關係を明らさまに表明したものに過ぎない。最も偉大なことは、最も單純なことである場合が往々ある。

キリスト以後百年あまりの間、彼に關する一般の信仰は大略キリストが說かれた通りであつた。その頃からギリシャの哲學が敎會の內に侵入してその感化を與へ始めた。この哲學がキリストの敎旨を少からず腐敗した。その中にキリスト自らに關する敎へも同じく腐敗されたのであつた。ギリシャ哲學は說い

た。神から出た多くの發射物があつた。ローゴスも亦これらの發射物の一つであつた。ローゴスは道であつた。道は神と偕にあつた。キリストは道であつた。それだからキリストは即ち神であつた。即ち以上の如く論じたのである。この哲學で薫陶された人で一六三年に死んだ初代教父の一人なるヂャスチンは、初めて此觀念を說き出した人であるが、彼は譬喩的の語を以てこれを說いたのである。キリストの死後百年あまり經つてから二百有餘年を經過した頃まで、キリストを神と稱へたところの一論文が世に行はれた。歷史家のいふところに由ると、この論文の著者は『劇しい性質のやゝ病的の人』であつたさうである。彼は調子外れな說を唱へて教會の有力者等に反對を試みた。その後漸次廣く歡迎されて教會の主要な教理の一つになつた三位一體論は、此の如き異教的起源から發生したのである。これ歷史の證明するところである。

純粹の基督教はキリストを神の子と說くが、神とは說かない。キリストも嘗

て自ら神であると要求されたことがなかつた。寧ろその反對で、彼の教の全體の意義がこれを否定して居るのである。彼は絕えず自己以外の他の人格に信賴して居ることを承認した。彼はその人格者を父と呼んだのであつた。彼はその人格者に祈願した。彼があれほど明瞭に、他の者に呼び求めたのに、彼自身に祈願したのだらうと假定するは馬鹿げた話だ。況して彼は彼自身の父であるなどゝ教へたと誣ふるのは愚も亦甚しい。若し彼が神そのものであると教へたら、さうしたかも知れない。萬一この假定が本當とすると、從順に關する彼のあらゆる言葉も、また從順であつた彼の生涯も無意味になつてしまふのである。念のために言うて置くが、吾人は近來自ら三位一體論者と稱へながら、其實さうでない大に變化した教理に就いて論じて居るのではない。吾人は唯一純粹の三位一體の教に就いて論ずるのである。その說によると、『キリストは神そのものであり』、神はキリストであり、聖靈は神とキリストと兩方であり、この

三者は一であり、この三者は二であり、この二者は一つであり、而してこの二者は三つであると主張するのである。實に理窟に合はぬことだらけである。キリストの眞の敎に正反對である。こんな敎が殆ど世界を通じて信ぜられるに至つたといふのが不思議である。

キリストは『我とわが父とは一なり』と言はれた。しかしヨハネ傳の十七章には、彼と彼の父の一つなる如く、彼の弟子等も『一ならん』ことを祈られたと書いてある。これを以て、彼の多くの弟子等が實際一人の個體となるやうに祈られたと、想像することは不可能である。弟子等が精神に於て、目的に於て、事業に於て、一つになることを願はれたに外ならぬのである。この意味の一致統合は神、キリスト及びその弟子等の間に存してゐたのである。また存すべき筈であつた。これを個性の一つとなり、人格の同一となるといふ意味に解することはできぬ。左ればキリストと天父の間に存してゐた一致も、精神・目的・事業の調

和の一致であらねばならぬ。キリストいはく『我と父とは一なり』(約十〇卅)。その意味は上文に引用したものと同樣である。彼の品性はそれほど神に近い。キリストの品性を見且知つた者は、神の品性を見且知つた者である。兩者の差は神はキリストよりも無限に大きいまでゝある。キリストを了解し鑑識するところの人は、常に彼に由て神を了解するに至るやうに感ずるのである。キリストは神々しいが、神ではない。彼は神ではないが、神の子である。天父の啓示者である。世の救主である。或人はいふ『我等は皆神の子等である』と。それはその通りであるが、キリストは神の最大の子である。全く些の罪を認められないほど高潔偉大である。靈的實在物として彼が偉大である爲に、世に知られた最高の靈的眞理を知り、且これを表明する能力を得たのである。諸君は事實が證明すると諸君の思ふだけ、高き位置にキリストを置いて差支ないが、ヨハネ福音書の第十四章に自らの地位を神と對照して語られたことを想起するときは、

諸君は矢鱈に彼を高く擧げてはならぬ。彼いはく『わが父は我よりも大なれば也』と。神を以てキリストより大なるものとすれば、神はキリスト以外のものでなければならぬ。キリストは神そのものであり得ないのである。しかし彼は肉體にありて神の品性を表明したものである。彼は神の精神と德の化身であつた。即ち神が啓示し、人間が受納(理解)し得るところの廣大な部分の化身であつた。

かくの如く觀察し來るときは、キリストと神との關係は子と父の明瞭單純な關係であること、又キリストは人に對して、啓示者且救主たる自然の關係を有せらるゝことを發見するであらう。吾人は彼の品性に於て或程度までは、正當に發達したあらゆる人間に見出されない何等の要素を發見し得ないであらう。彼の完全と彼の偉大な能力は一般の人々の品性にあらはるゝそれらのものと、類を異にした何等の元素に由るのではなく、唯彼がこれらの元素を所有した程度

の相違に由るのである。キリストに充實してゐた神の力と靈は、ある程度まではあらゆる人の享け得るものである。その程度は各人の力量に由るのである。かくの如くキリストが常人と異なる所以は程度の問題であつて、素質の相違ではない。キリストは常人ではなかつた。彼は非常人であつた。彼は完人であつた。彼が遙かに常人を超越してゐたことは、彼が世界に知られたあらゆる道德上及び宗教上の眞理をその生活に體現されたことに由つて分る。基督教の中に何等かの形相に於て教へられてない道德上又は宗教上の眞理を、世界の他の宗教若くは德教の中に見出すことは不可能である。吾人がすでに述べし如く、キリストは天父を知り、天父の性格を世の人に啓示した。それほど彼の靈的の知覺と靈的の知識が偉大であつたのである。夫故に彼は完い人性の啓示者である。と同時に、神の品性の啓示者である。完い人性と神の品性はその品質同一であつて、唯程度の異なるのみである。キリストは世界に知られたあらゆる道德上